

# にちぎん

2015 NO.43

秋



インタビュー 扉を開く

**為末 大** 元プロ陸上選手

自分を生かすための「諦める力」

地域の底力

**東川町** 北海道上川郡

「写真の町」宣言から歩んだ30年の歳月が北海道東川町の文化と人の心を育てた

対談 守・破・創

**辻井伸行** ピアニスト

**佐藤健裕** 日本銀行政策委員会審議委員

クラシック音楽の魅力を多くの人に伝えたい

エッセイ “おかね”を語る

**和田 竜** 作家 戦国武士の貯蓄

戦国時代の武士は金銭をいたずらに忌避することなく、実に貯蓄に熱心で、それを実現した者を素直に評価する風があった。

山内一豊の妻の逸話など、その典型的な例であろう。一豊の妻の持参金のおかげで一豊は金十両の駿馬を購入することができ、その駿馬にまたがって大馬揃えに出たところ、主人の織田信長に褒められる。「ずっと浪人していたゆえ貧しかっただろうに、このような駿馬を買い取ったこと、弓矢を取る身のたしなみとしてこれ以上のことはない」と激賞された。

戦場で武功を上げたわけでもなく、ただ高価な馬を買っただけのことでこの評価である。無論、駿馬を買えば武功も上げやすくなることを見越してのことだが、信長は金を貯めたことを素直に評価したのだ。信長自身、金銭好きで永楽銭の幟を用いたりした。

黒田如水の重臣、栗山備後も貯蓄に熱心で、このため贅沢を極端に嫌った。他人にまでそれを要求し、家中の者が華美な衣装を身に着けていると、「ケ・ハレ」といふものが世の中にはあるのだぞ」と口を酸っぱくして注意し、高価な馬を買ったという者があれば、「所詮は馬一頭ではないか。倍の値がしたとしても二



絵・江口修平

## 戦国武士の貯蓄

和田 竜

頭分の働きをするわけではあるまい」と、信長とは正反対の理由でこれを戒めた。

栗山の主人、黒田如水についても普段は吝嗇だったことが知られている。

日根野備中という武将が如水に金を借り、その礼に如水を訪ねた際、如水は家臣に向かって「先日届いた鯛を三枚におろして、骨のところを煮て出せ」と細々命じたので、日根野は「随分ケチ臭いな」と思ったとの話が残っている。後日、如水は家臣に、「日根野は最近贅沢なようだから、あんなことを言って暗にたしなめたのだ」と言い訳したというが何のことはない、この当時の武士はだいたい普段は質素なのである。信長の重臣、滝川一益などは普段の着物が一枚しもなく、それを洗っている際は乾くまで禪一丁でいたという。

だが、それもこれも合戦のためであった。いざ合戦となると、武将たちは惜しげもなく貯めた金をばら撒いた。戦国武士たちは徹底したリアリストである。合戦を有利に運ぶには、まずは金だ。それゆえ金を大事にし、貯蓄にも熱心だったのだ。「武士は食わねど高楊枝」というのは、合戦も金もなくなった江戸時代の武士のたわ言かやつかみに過ぎないのである。

わだりょう●1969年、大阪生まれ、広島育ち。早大政治経済学部卒。2007年『のぼうの城』（小学館）で小説家デビュー。同書は累計200万部を超えるベストセラーとなり、2012年映画公開された（脚本も担当）。織田信長軍と毛利家・本願寺・村上水軍の合戦を描いた長篇小説『村上海賊の娘』（新潮社）は吉川英治文学新人賞、本屋大賞2014、親鸞賞を受賞し、上下巻累計100万部のミリオンセラーとなった。



© Shinchosha



2 エッセイ／“おかね”を語る  
**戦国武士の貯蓄** 作家 和田 竜



4 インタビュー／扉を開く  
**為末 大** 元プロ陸上選手  
自分を生かすための「諦める力」



9 地域の底力——北海道東川郡東川町  
**「写真の町」** 宣言から歩んだ30年の歳月が  
北海道東川町の文化と人の心を育てた

16 対談／守・破・創  
**辻井伸行** ピアニスト  
**佐藤健裕** 日本銀行政策委員会審議委員  
クラシック音楽の魅力を多くの人に伝えたい



20 お金の源——素材の歴史と作り方③  
**金貨** 齋藤 努 国立歴史民俗博物館教授

24 FOCUS → BOJ ⑩ 国際局「国際収支課」の仕事  
**日本の「家計簿」——国際収支統計**

28 日本銀行のレポートから  
**「地域経済報告」**(さくらレポート) —2015年7月—  
地域の視点「各地域における消費関連企業の最近の販売動向と事業戦略」

32 **金融高度化セミナー**(地域創生に向けた創業支援への取組み)を開催

35 トピックス  
**日銀本店本館を舞台にドラマ撮影／2015年国際コンファランスを開催** ほか



39 AIR MAIL from Basel  
**スイス人の奇抜な発想**

## 表紙のことは

日本銀行福島支店は、東北地方初の拠点として、明治三十二年(一八九九)に出張所として開設されました。その後、明治四十四年(一九一一)に、支店に昇格しました。

表紙の店舗は三代目店舗として昭和五十三年(一九七八)に建て替えられ、現在も使用しているものです。ちなみに、二代目店舗は、日本銀行本店本館や東京駅を設計した辰野金吾博士とその高弟・長野宇平治の共作で、大正二年(一九一三)に建てられたレンガ造りでした。三代目店舗は、その後の七十年ほどの福島県経済の発展を反映し、二代目店舗に比べ延べ床面積で二倍、金庫収容能力は六倍の規模となりました。また、耐震性も比較にならないほど高いものにされました。

平成二十三年(二〇一一)三月十一日、東日本大震災が発生し、福島県は甚大な被害を受けました。幸いなことに、三代目の現店舗は、地震の被害をほとんど受けて、営業を継続できました。福島支店は、福島が大震災や原発事故の被害を乗り越える手助けをこれからも続けたいと思います。



表紙・画 北村公司



元プロ陸上選手

# 為末大

Dai Tamesue

陸上競技・男子四〇〇メートルハードルで、二〇〇一年と〇五年の世界選手権において銅メダルを獲得し、シドニー、アテネ、北京と三大会連続でオリンピックに出場。日本を代表する陸上選手の為末大氏は、企業に所属するアスリートではなく、レースの賞金などで生計を立てるプロ選手として活動を続けた。引退後も組織の指導者になる道は選ばず、自ら立ち上げた法人組織を通じてスポーツ全般の社会的役割に関わる仕事を進めている。常に「自分」を見つめて思索し、数々の扉を開いてきた為末氏に、二五年の競技生活を支えた独自の哲学、五年後の東京五輪への期待などを伺った。



# 自分を生かすための「諦める力」

## 一八歳で意識した 自分自身の限界と可能性

——為末さんは陸上競技の短距離種目で日本人初の世界大会メダリストとなり、数少ないプロの陸上選手としても活動されました。一方で、著書のなかでは「人生は可能性を減らしていく過程でもある」と、トップアスリートにしては意外なことも述べられています。

為末 「可能性は無限だ」という考え方もあり、それを完全に否定するつもりはありませんが、僕は「自分」という存在は、どこまでいっても「自分」にしかないと思うのです。二五年間に及んだ競技生活で僕がずっと考えていたのは、自分に合う領域はどこか、自分は何ができるのかということでした。そう考える過程で可能性は減っていきますが、やがて自分自身にできる可能性だけが残

り、見えてくる。そこに思い切り特化すると、矛盾しているかもしませんが、可能性は広がります。自分に合う領域にぎゅっと絞って頑張れば、もつと可能性が広がり、何かができるようになる。その作業を、僕は競技生活のなかだけでなく、引退後の現在に至るまで続けてきた気がします。

——自分の可能性が減る、限界が見えてくるという心境は、社会に出てある程度の年月を経て多くの人たちが抱くものではないでしょうか。なぜ為末さんは、現役時代の若い時期からそのような意識が芽生え、自分の専門種目を一〇〇メートルから四〇〇メートルハードルに変えられたのですか。

為末 僕は八歳の時、地元にある陸上クラブで競技生活をス

タートしましたが、自分の限界や可能性について意識し始めたのは高校生の時、一五〜一八歳のころです。

中学時代は一〇〇メートルや二〇〇メートルなどに取り組んで、同世代のトップに立っていましたが。僕は早熟型で、身体の成長が他の選手より早くピークに達したこともあって一番になったのでしよう。ところが、一五歳で身長も体重もピタリと止まってしまった。まずそれに気づきました。

——肉体的に成長しなくなったという気づきが、自分の可能性や限界について意識するきっかけの一つになったと。

為末 何とか身体をあと一回り大きくしようとして、いろいろ努力はしました。毎日牛乳を飲んだり、ポケットに小魚を持ち歩きながら食べたり……。しかし、身長は伸びないし、体重も増えない。一五歳の身長・体重は、ほぼ今と

変わりません。

高校三年生になると記録は伸び悩み、結果が出なくなりまして。自分としては一生懸命やっていたつもりでも、結果が出ないと、「努力不足だ」「もつと頑張れ」と言われました。僕も絶対に諦めるのかと頑張る。しかし全然結果が出ない——。

人生で最も悩んだ時期だったと思います。結果を出せない経験を繰り返すうちに、僕は「この世の中には、努力してもどうにもならないことがあるんじゃないか……」という気がしてきました。それでも、「このまま終わるなんて、絶対に嫌だ」という執念が自分を支えている。そんなとき、世界のトップが集う国際大会で四〇〇メートルハードルの試合を観戦する機会があったんです。——何かを感じるところがあったのですか。

為末 陸上競技の短距離種目は



黒人選手が強いです。僕も一八歳で出場した初めての世界大会で

全く歯が立たず、彼らに勝つのは厳しいと感じていました。ところが、その国際大会で、唯一、彼らが転んだレースが四〇〇メートルハードルだったんです。ハードルに足を引っ掛けて転倒したその姿を見た瞬間、僕は「こっだー」と。レースに複雑な要素が加われば、自分の器用な能力を生かす余地が大きいと、ピンときたのです。同時に、すごくうれしかったです。

## 「手段」を諦め「行き先」を諦めず

——小学生の頃から取り組んできた専門種目を変更することに葛藤はありませんでしたか。一八歳といえば、多感な時期だと思いますが。

**為末** 感情的にはそう簡単に割り切れたわけではありません。しかし、尊敬する恩師の一人、高野進さん(現日本陸上競技連盟理事、四〇〇メートル日本記録保持者)に相談した時、自分の中に「世界で勝ちたい」という意識が強烈にあると気づかされたんです。日本

た。まだ自分が生きていける領域があったと気づいて。

その日、すぐグラウンドに出て、ハードルを練習してみると、結構跳べたのです。日本へ帰って、専門の先生に見てもらうと、「お前、ハードルの才能あるじゃないか」と。そうして練習を積むうちに、僕は「努力しても一〇〇メートルでトップになるのは無理かもしれないけれど、四〇〇メートルハードルなら自分にも可能性がある」との確信を持ち始めました。

の競技という感じなのです。

——そうすると、一〇〇メートルを諦めるときは勇気が要りませんでしたか。自分のなかのプライドにも関わる決断になりますよね。

**為末** 決断する時に思ったことは、自分の葛藤を突き詰めると、「手段」ではなく「行き先」を悩んでいるのだと。一〇〇メートルを続けてメジャーな領域の一〇番手ぐらいの選手に甘んじるのか、ハードルに転向してニッチな領域でも王様を目指すのか、どっちの生き方をしたいかを決めなければいけないと思ったのです。

——自分を生かし、世界で勝つ。そのための決断だったのですね。**為末** 一〇〇メートルを諦めて、四〇〇メートルハードルで一番になる戦いを諦めないと決断したのです。

——仏教で「諦める」は「真理や道理を明らかにして、見極める」という意味で、むしろポジティブな言葉だと著書で書かれています。

**為末** 自分の「行き先」さえ諦めなければ、「手段」を諦めても



いいのではないのでしょうか。ただ、今振り返ると、僕は自分のプライドをコントロールできるまで一〇年ぐらいかかった気がします。最初のうちは、何とかハードルで結果を出さないと一〇〇メートルを諦めたかいない、という気持ちが強かった。一体、何が自分のプライドの源泉になっているか、どうプライドを整理するか。それは、走る行為と本などを書く行為のなかで、自分の内側を掘り下げ、わかってきたのだと思います。

——自分を客観視したり、内面



ためすえ・だい ● 1978年広島県生まれ。中学3年の全日本中学校選手権100メートル、200メートルで2冠、ジュニアオリンピックでは当時の日本中学記録を更新。高校3年でハードルに転向。大学時代、日本学生選手権400メートルハードル3連覇。2001～05年まで日本選手権の同種目5連覇。世界陸上選手権では、01年エドモントン大会で3位に入り、短距離・スプリント種目で日本人初のメダルを獲得(同大会での47秒89は現在も日本記録)。05年ヘルシンキ大会でも銅メダルを獲得した。オリンピックは、シドニー、アテネ、北京の3大会に出場。2003年、プロへ転向。競技を続けながら、「東京ストリート陸上」や「ひろしまストリート陸上」(日本のトップ陸上選手達が、路上で陸上競技を行うイベント)をプロデュースするなど多方面で活躍。12年6月、日本選手権を最後に25年間の競技生活から引退。現在は、一般社団法人アスリートソサエティ、為末大学などを通じ、スポーツと社会、教育に関する活動を幅広く行っている。自身のHPでスポーツや社会に関することを発信している。http://tamesue.jp/ 著書に『諦める力——勝てないのは努力が足りないからじゃない』(プレジデント社)、『負けを生かす技術』(朝日新聞出版)、『走る哲学』(扶桑社)などがある。

を見つめたりする作業は、簡単ではありません。為末さんが若くしてできたのは、少年時代のご家庭にも何か要因があるのでしょうか。

為末 うちは全く普通の家だったんです。父は広告会社に勤めて、母は専業主婦。姉も陸上をやっている。県大会で何番かに入りましたが、妹は足が速いというわけではありません。ですから、いきなり僕みたいな足の速い男の子が出てきて、家族は戸惑っているような感じでした。

でも、僕の走る舞台が国内から世界へ大きくなり、一定のレベルを超えてからは、他人事のように僕の競技生活を見ていくようになった。世界を意識して練習し、家に帰る。すると、そこでは普通の家庭の日常が静かにある。そんな感じでした。他の選手に聞くと、応援に力が入る家庭も少なからずありますが、僕の家族は全くなくて、それがかえってよかったですね。

僕は一八歳の頃からコーチをつけずに自分で練習していました。

た。現役最後の四年はグラウンドに選手が自分しかいない状況で練習していたんです。個人で争う陸上競技の特性から、そんな練習方法も可能になるのでしょうか、それが一番僕にとってやりやすかった。走りに没頭できるので。

—— たった一人で、世界が相手のレースに挑む。その時、気持ちを支える源泉は何でしょうか。為末 そこで勝ちたい、目指した順位を獲りたい、そういう気持ち

## 幸福とお金の関係

ちが強かった。それと同時に、自分の身体を、自分で思い通りに動かしたいという欲求もありました。それができている時の心地良さは、身体を使ってパフォーマンスする人間にとって最高のものではないでしょうか。僕は速く走れる身体、他の人たちと少し違う身体を持って生まれたのだとしたら、これを思い通りに動かして、どこまで力が出るかを知りたい。そういう気持ちの方が強かったかもしれません。

—— ご自身はスポーツ選手のセカンドキャリアの支援を行う一般社団法人アスリートソサエティを設立されています。ご自身がプロの陸上選手になられた時、あるいは引退された後に、経済面も含めた人生設計について、どう考えていましたか。

為末 プロのアスリートの世界は、現役からセカンドキャリアに至るまで、芸能人の世界に近いと思います。アスリートはまず、競技を頑張り、知名度を上げる。そ

れを売り物に企業スポンサーからお金を獲得するというビジネスモデルが多いと思います。難しいのは、アスリートが成功し、自分自身に華やかなイメージが付くと、それを壊すまいと意識してしまうこと。スポンサーからお金を獲得するうえでイメージを保つことは重要です。ただし、誰かと会食一つするのも高級店ばかりに出入りしたり、次の仕事を選び過ぎたりしてしまう。日常生活にかかるコストは高くなるし、





「Sports Asia」プロジェクトの一環でブータン王国スポーツ親善大使として若手アスリート達と強化合宿を行う © Kensaku Seki

新しいチャレンジには躊躇しがちになるのです。

さらに、成功したアスリートが次々に出てくると、自分のイメージをいくら保つても周りの環境が変化して、スポンサーからの収益は大きく変動します。僕は、アメリカで長く競技生活を続けていたので、人付き合ひ等いろいろなコストを圧縮することができましたけれど、日本にいたら無理だったかもしれないという気がします。ですから、アスリートがプロになる時、あるいは成功した後、自分のイメージよりも日常生活をミニマムに保つことを心

掛け、スポンサー収入に合わせて生活コストを上げたり、世間の目を過剰に意識したりしてはいけないと思います。

——「幸福な人生とお金」の関係について、何かお考えになることはありますか。

為末 僕は、二〇一五年四月からブータン王国オリンピック委員会のスポーツ親善大使を務めています。同国は幸福度が高い国として知られていますが、特に近年寄りのなかには「私の幸福度はそんなに高くないよ」と言う人もいます。リゾート開発が自分の目の前で進んだり、リッチな人たちが急に現れたりしているのを見て、そう言うのでしょうか。やはり、幸福度というのはある程度、お金と一緒に上がったり、下がったりするものなのかもしれません。

しかし、その一方で、お金を理解することは将来の不安を取り除くことにつながるのではないかと、そんな気もしています。お金と一緒に上がっていく幸福は、安心を得ていく幸福だと思おうのですが、そもそもお金とは何かが

わかれば、お金があまりなくても人生に十分安心を生んでくれると思うんです。「金融リテラシー」と言うと、少し大げさになるけれど、銀行の仕組みや投資、保険、税金など、お金のまつわるシンプルな基本を知るだけで、少ないお金でも何かができるようになって、安心を得るといふ幸せにも近づけたりするという気がしますね。

——最後に、五年後、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。開催まで、どのように関わり、何を期待しますか。

為末 僕は、二〇二〇年までより、二〇二〇年の後を重視して、オリンピック・パラリンピックに関わることができればと思っています。前回の東京オリンピック（二九六四年）の後、第一回目に開かれた都議会の資料を見ると、当時の都知事が冒頭で「皆さん、何かいい目標はありませんか」と言っているんです。二〇二〇年までのことばかり考えると、そんな風にならないとも限りません。大事なのは、その後の日本がどうなるかです。開催を機に未来の



課題に対応できる社会になるために、問題解決型のオリンピック・パラリンピックにしましょう、ということです。二〇二〇年に向けてバリアフリーの都市づくりを進めれば、その後も高齢化社会を支える一助となるかもしれません。オリンピック・パラリンピックを開催した国は、将来の問題を少しでも解決できるといふことを日本が示して、そのモデルを聖火と一緒に次の開催地へ引き継ぐことができれば、これはすごく格好いいなと思います。

—— 本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長・高橋経二）



地域の底力

北海道上川郡東川町

# 「写真の町」宣言から 歩んだ三〇年の歳月が 北海道東川町の 文化と人の心を育てた

写真の文化を町に根付かせる。

道なき道に行く試みはやがて、小さな町を豊かに培った。

そして今、さらなる道が切り拓かれ、

未来への種が蒔かれている。

取材・文 山内史子  
写真 野瀬勝一

北海道東川町に位置する旭岳は、日本最大の国立公園である大雪山国立公園の象徴的存在。その登山は東川町の山麓駅からロープウェイを利用しての移動となる。写真の「鏡池」周辺ほか、気軽なトレッキングも楽しめるエリアもある。





1985年の条例化以来役場の建物を飾る「写真の町宣言」。30年の実績を重ねた2014年、写真に関してはもはや東京を上回るの思いをこめた「写真文化首都」宣言が松岡市郎町長によって加えられた。

### 三〇年の歳月を経て 根付いた「写真の町」

北海道十川郡東川町は、道内のほぼ中心部に位置する人口約八〇〇〇人の自治体。旭川市の中心部からは約一五キロ、移動の拠点となる旭川空港からは約五キロの距離にある。

産業の要は、米づくりをはじめとする農業と木工業。米は「東川米」のブランドで注目されつつあり、全国的にも人気が高い「旭川家具」は、約三割がこの町で生産されているが、町の名に覚えのある方はさほど多くはないだろう。

とはいえ、そうとは気付かず旅している可能性はある。大雪山連峰の主峰であり道内の最高峰、標高二二九一メートルの旭岳を有し

写真文化首都創生課の西原義弘氏と宮崎アカネ氏。西原氏は町の事業の一環として、観光の宝である大雪山国立公園に関するエピソードをまとめた「大雪山」（共著：清水敏一氏、新評論刊）を執筆した。



ているのだ。麓の旭岳温泉、天人峡温泉を含め、町を訪れる観光客は年間一〇〇万人を数える。

さらには写真の世界において、実は東川町は国内外で広く知られる存在だ。発端は一九八五年六月一日、「写真の町」を宣言して条例化したことに遡るといふ。その経緯を知る副町長の合田博氏が、かつてを振り返った。

「二村一品運動が盛んな時代でしたが、全町民が関われる町づくりのために、物ではなくて文化

が必要だというのが、当時町長を務めていた中川音治氏の考え。旭岳を含む大雪山国立公園や、日本の滝百選にも選ばれた『羽衣の滝』がある東川町は、日本一の被写体になれる。そんな思いから『写真の町』を宣言したんです」

しかしながら、著名な写真家の出身地でもなく、カメラ産業と町が関わっていた過去もなく、という状況で周囲は戸惑った。

「何らかの形で町をアピールし、観光客を増やすのが狙いだったと今はわかります。でも、突然に写真の町と言われたあのときは、われわれ職員も町民も、簡単には理解できなかったですね（笑）。バブル期で、どこの行政もハードに力を入れていた頃ですし」

写真映りの良い町づくり、人づ

くり、物づくりを、とのキャッチフレーズのもとで行われたのは、写真界で活躍する人に東川賞を贈る「東川町国際写真フェスティバル」だ。回数を経て、知名度と権威は次第に高まる。一方で、芸術性に優れた作品が必ずしも町民に親しみをもたらずわけではない。日常と乖離したイベントには、否定的な意見も聞こえるようになる。

転機が訪れたのは、宣言から一〇年目の山田孝夫前町長の時代。全国一の高校写真部を選ぶ「写真甲子園」がスタートしたことによる。三人ひと組のチーム制。各地方の初戦を勝ち抜いた高校生が東川町に集まり、町内での撮影とプレゼンテーションで競い合う。

「しくみがわかりやすかった上、撮影に対する協力やホームステイ、



「観光は光を見ると書く。景観だけではなく、人も気持ちも、輝くものすべてが観光になるというのが、中川音治元町長の口癖でした」と語る合田博副町長。





地方戦を勝ち抜いた代表校の生徒たちが本戦で東川町を訪れ、景色や人々を撮影する「写真甲子園」。技術にも増してチームワークが求められる分、そこから生まれる葛藤や逡巡が参加者の心を育み、熱い記憶を残す。  
(写真提供：東川町役場)



炊き出しなど、いろいろな形で町民と参加者との交流する場ができたんです」

参加した生徒への応援、そしてかつて自分の先祖が暮らしていた故郷の高校への応援を通して、町の人たちの思い入れがそれぞれに深まるなか、「写真の町」に対する理解も高まってきた。同時に「写真映りの良い町づくり」も、自然の住宅から店の看板、公共施設まで、環境美化に取り組み意識が、町民、職員の間で根付いていく。

## 写真を介して次第に育まれた町や人の心

歳月を経て、今や東川町は写真部に所属する高校生の憧れの場所になった。写真の町課課長の窪田昭仁氏によれば、第一回に約一六〇校だった応募校数が、第二二回目の今年は五一四校まで増え、七〇〇余名が地区ブロック大会に訪れたという。

「生徒だけではなく、父兄や関係者まで広く東川町に愛着を持っていただけという意味で、未来への種蒔きができていっているのかな。美しい景観はもちろん、東川町の人たちに会いたいという気持ちが生まれるのも、観光資源なのだと思います」

毎年、生徒たちが町内で撮影する景色が当たり前となるなか、町の人々にもいつしか変化が生じた。「うちの町の皆さんは、カメラを向けられると『いいよ』って。撮られることに慣れてきたんですね」窪田氏の話を聞き、なるほどと膝を打った。東川町を訪れて早々、老若男女すれ違ふ人々が必ず、「こんにちは」と声をかけてくれるの

に気づき、驚きながらも嬉しく思っていたのだ。撮影を介して、コミュニケーションの基盤、すなわち「人づくり」も構築されているのを実感した。

「写真の町」が浸透するにつれ、写真家やイベントに関わった人が移住するケースも見られるように。そのひとりが、写真甲子園の本戦で町に滞在した吉里演子氏だ。大学時代も毎年ボランティアのスタッフとして東川町への旅を重ねた後、「心のふるさと」というテーマの卒業制作で再び町を訪れる。

「東川町ってどんな町ですか？」そう尋ねながら、町の皆さんを撮影していたんです。一言目にはこ

東川町散策中に目に留まるのは、素朴でユニークな木製の看板の数々。写真の町にふさわしい、思わずシャッターを押したくなる温もりある景観だ。

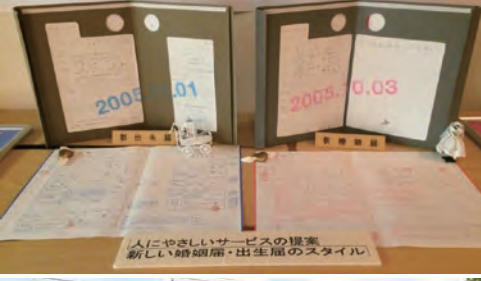


こは田舎だし何も無い町、という答えが返ってきたのですが……」それだけでは終わらない会話を、吉里氏の胸に深く刻まれた。「天気の良い日の山はすごくきれい、お水がおいしい、お米がうまい。ひとりひとりが、自分の言葉で町の良さを表現する。とても印象的

東川町文化ギャラリー館長および写真の町課課長を務める窪田昭仁氏と、同ギャラリー学芸員の吉里演子氏。ギャラリーでは「写真の町東川賞」の作品展示からワークショップまで多彩なイベントが行われる。







上/東川町の役場で出生届や婚姻届を提出すると、フレームにおさめた書類の写しが記念品として贈られる。よそにはないサービスゆえ、遠路はるばるこの町を訪れ、入籍するカップルもいるとか。

(写真提供:東川町役場)

下/株主として町に投資した人は、一棟貸しの「小西音楽堂」ほか多様な宿泊施設を優待で利用できる。

「交流人口が増加すれば、消費が生まれる。地場の消費の純増につながる」と話す松岡市郎町長。前例がない、予算がない、ほかの町ではやっていない、という理由だけでは新たな提案を却下しない、松岡氏の前向きな姿勢は役場全体の根幹になっている。



## 町を思う人を増やす 独自の株主制度

「写真の町」宣言から三〇年、行

でしたね」

「東川町の人にはまった」と笑う吉里氏は現在、「東川町文化ギャラリー」の学芸員を務めている。

政サイドでは現在、どのような取り組みが行われているのだろうか。松岡市郎町長からは、町に婚姻届を出した夫婦には立派な額装の婚姻届を贈呈するなどの様々なお話を伺ったが、そのなかでも興味深かったのは、一口一〇〇〇円から町に投資ができる株主制度だ。

一般的には自治体存立には一万人が必要だといわれるが、〇三年町長に就任した当時の町の人口は七五〇〇人程度だった。

「二万人に満たなければ強制合併もあり得るなか、定住人口八〇〇〇人、応援人口二〇〇〇人、合わせて二万人を目標としたんです。その応援人口に該当するのが、株主の皆さん。投資で得た財源は、町民だけではなく、広く国民に恩恵がある活動に充てています」

写真の町の整備から自然保護、オリンピック選手育成まで、株主は複数ある事業のなかから、投資先を選ぶ。結果、米や野菜など町の特産品が届くシステムは最近話題のふるさと納税に近いが、それだけにとどまらない。

株主は「東川町特別町民」として、町内の施設利用が優待される。

投資金額によっては、無料の宿泊も可能だ。すなわち、町を訪れたくなるしくみになっているのだ。

現在、株主は約四一〇〇人、総投資額は一億円を超えたそうだ。株主のための宿泊施設を見学したところ、設備があまりに良過ぎるため、株主への還元が行き過ぎてはいないかとの問いを松岡氏に投げかけた。

「町に来て、泊まって、その良さを体験してもらおう。それが口コミで伝わるのが、宣伝効果として大きいと思うんです。PR経費だと考えれば、さほど負担ではありません。結果が即、出なくとも、徐々に必ず広がっていくだろうと思えました」

写真関連のイベントに際しても、参加者の交通費、宿泊費は町が負担している。これらの施策によって、交流人口に加え住民の数も少しずつ増え続け、二〇一五年には目標の八〇〇〇人を超えたそうだ。

「東川の文化になじんだ人が、また人を呼ぶという流れが生まれています。小さい町ですから、お互いに顔が見える。何かあったときにはすぐ行きます、対応しますという姿勢で役場も動いています」

実際、移住した方に話を伺うと、役場の職員の熱意、移住やその後の暮らしへの支援、そして人が人を呼ぶ連鎖が確かに見えてきたのが面白い。

## 水がおいしいから 人がやさしいから

たとえば、今年四月に東京から移住した弁護士森山大樹氏と妻の絵美氏。縁があつて東川町を訪れた際、豊かな自然と食事や水のうまさ魅せられたそうだ。





弁護士の森山大樹氏と、町の地域おこし協力隊の一員として働く絵美氏。「地域の皆さんも、なにが困ったら聞いて、と言ってくれる。東川町は行政だけではなく、地域ぐるみの共同体意識が強いですね」と大樹氏は話す。



そう、東川町にはひとつ、ほかにはない宝物がある。上水道の普及率はゼロ。というのも、環境省選定の「平成水の百選」にも選ばれた大雪山系の地下水を全戸が利用しているためだ。水源では毎分約四六〇〇リットルの水が湧き出ている。

「空気がきれい。景色は広大。しかも、こんなにおいしい水があるほどにあるなんて。直感的にここに住みたいと思いました」

初めての東川訪問を思い出し、絵美氏は笑顔を見せた。移住を決意してからは、役所の柔軟な対応に驚いたと大樹氏は話す。

「通常なら役所になにか相談しても、前払いがない、予算がないと門前払いをうけることも多い。ここ

ろが東川町は、何とかできるよう考えますとまずは受け止めてくれた。検討した上で、判断してくれたんです」

不妊治療の費用が全額免除になる支援にも、夫妻は注目した。

「結果的にはお世話にならずにすみました、心強い制度だなと思えました」という絵美氏は、移住後、役場との話し合いが爽り、「地域おこし協力隊」として町が取り組む



右／東川町のそこかしこで目に入る、旭岳の美しい姿。町の人にとっては日常の景色ながら、移住を考える人にとっては新たな生活へと背中を強く押す魅力のひとつになる。  
下／東川町の人々の生活水である「大雪旭岳源水」はカルシウムをはじめミネラル分を豊富に含む、弱アルカリ性の中硬水、自由にくめるため、年間約五万人が町外からも訪れる。

ヘンプ（産業用大麻）注の栽培研究に携わっている。

大樹氏は東川町に事務所を構えた最初の弁護士となり、この夏からは町の依頼で、月一度の無料法律相談を開催。旭川空港が近いため、東京の仕事もそのまま継続できているそうだ。

人気の蒸しパン専門店「しのばん」を営む宇田川兼司、里香夫妻もまた、東京郊外からの移住者だ。北海道に移ったものの、なかなか定住の場所が見つからなかった。九年、役場の対応に背中を押され

宇田川兼司、里香夫妻による「しのばん」は、北海道産の小麦と天然酵母を使った蒸しパン専門店。素朴なおいしさが評判となり、田園風景のなかに佇む店には、近隣の旭川周辺はもちろん、広く道内からドライブがてらの客が訪れる。



たという。

「随分と親切にしてもらったのはポイントが高かったですね。小さい子供もいたのですが、幼稚園や保育園も、すぐ入れられるから大丈夫ですよと言ってくれたんです」

そう話す里香氏は、旭川空港から車で一〇分という利便性も、最終的な決断に影響したという。

「空港に近いのは、私たちのような移住者にとって大事なことです。東京の実家でもなにかあっても、すぐに駆けつけられますから」

地元社会にすぐなじめるのだからかとの懸念には、兼司氏が笑ってみせた。

「うちの子が通う小学校は全体で四〇人ほどの小規模校で、運動会も学芸会も、すべて親が参加してつくり上げる。親も子供も、いつものまにか巻き込まれました。面倒くさいと思う人がいるかもしれませんが、私たちが楽しんでいきます」  
夫妻が営む「しのばん」をはじめ、最近、道内の雑誌で東川町の



注 陶酔性の薬理成分が殆どない大麻。日本では昔から衣服や漁網などに用いられてきたが、戦後は大麻取締法によって栽培が厳しく制限。海外では産業用のほか、医療用などにヘンプの合法化が進んでいる。



各棟に薪ストーブが設けられた、ペンション「ニセウコロコロ」を営む正垣智弘、芳苗夫妻。この町で生まれた玲三郎くんほか、お子さんは4人。建物のまわりにはどんぐりの苗が植えられ、「10年後には森になる計画」と芳苗氏。



## 同じ思いを抱く人が いつしか集まるように

そんな町の環境を活かし、ペンション「ニセウコロコロ」(「ニセウ」

店が取り上げられることが多いとの話にも興味を促された。町を散策中、数多くのカフェや雑貨屋が、この町には点在しているのに心ひかれていたためだ。料理のおいしさにしても、小物のそろえにしても、顔や財布のひもが簡単に緩むほど、いずれもレベルが高い。



「ニセウコロコロ」を手がけた北の住まい設計社は、家具の設計、販売に加え、小学校跡の広い敷地を利用したカフェ、雑貨店なども人気を呼んでいる。

とはアイヌ語で「どんぐり」の意味)を営むのは正垣智弘氏、芳苗<sup>かえ</sup>氏だ。

芳苗氏にはもともと北海道への憧れがあったが、最初から東川町を目指したわけではなく、札幌周辺をはじめ時間をかけて探し歩いたとか。やがて人づてに東川を勧められ、旅行好きだった経験を活かし、宿泊施設を思い立った。

スタイリッシュなペンションは、家具にいたるまで東川周辺で人気の設計事務所が担った。朝食で用意されるパンや野菜、卵など食材の多くは東川産。さながら、町のアンテナショップのようだ。

「皆さんの意識が高く、自然にいいものがそろいます。お客様

のなかには、ここに滞在して、実際に移ってきた方も何組かいます。私たちが特に、移住を促進しているわけではなかったのですが」

芳苗氏の言葉を継ぐように、智弘氏が話す。

「ここでは、皆さんが町をよくしようという思いが伝わってくる。東京にいたときにはない感覚です。子供を連れてきたと、周辺の方々歓迎されたのも嬉しかったですね。都会では子供の声が騒音になり得ますから」

最後は、町からの支援を受けて



木工クラフト作家の千葉章弘氏は、飛行機の操縦室と管制室とのやりとりを丁寧に描いた「空のみち」(月刊たくさんのふしぎ2012年10月号) (福音館書店)で、児童書作家としてもデビュー。/千葉氏の作品の一部から。手前が「乳歯&へその緒入れ」。

数年前に独立した、木工クラフト作家の千葉章弘氏のケースをご紹介します。神奈川県での仕事を辞め、一七年前に旭川の技術専門学院の造形デザイン科に通い始めたことで、東川町での暮らしが始まった。

「この町には、独立開業資金という『起業化支援制度』があるんです。設備投資の三分の一まで、上限一〇〇万円が起業の際に支援される。すごくありがたかったです」

町との関係をより深めたのは、千葉氏が考案した「乳歯&へその緒入れ」。抜けた歯を天井裏や縁の下に投げ込むのが難しい、現代の住宅事情をふまえて生まれた小箱だ。

そもそも東川町では、子供の誕生の際に手作りの椅子をプレゼントされる「君の椅子プロジェクト」







中学校卒業時に名前を刻んで生徒に贈与される椅子(左)と、東川小学校内に置かれている生後100日を記念して贈られる「君の椅子」(下写真)。ともに地元の工房で製作。子供たちを見守りたいという町の思いがこめられている。



## 子供たちの教育担う 人生のハブを目指して

が展開されていた。さらに、中学

三年間使用した木の椅子も卒業と同時に使ってきた子供にプレゼントされる。子供の成長を見守るそのコンセプトと、千葉氏の作品はつながる。町長のそんな判断により、椅子とともにひとりひとりの名前を刻んで「乳歯&へその緒入れ」が贈られることとなった。

「自分の住む町で生まれた子、すべての名前に目を通せるのは、なかなかできない体験。うれしく思っています。男の子だったらちよつと力強い木目にしたり、女の子だったらやさしい感じの木目を選んだら、町の規模がさほど大きくないから、思いをこめつつ作業できるんです」

今回、お会いした方々は、三〇

〜四〇代。自然に恵まれた東川町の暮らしを楽しむだけでなく、交流人口や移住者を呼び込む橋渡し役になったり、町民の暮らしに貢献したりと、図らずも相互作用が生まれているのが興味深い。町長の松岡氏はさらなる未来を考えていた。

「地方創生論として高齢者は田舎に住んだらいいという考えがありますが、僕は逆だと思っんです。若い人たちの子育てや教育は農村でやり、高齢者は病院が近く買い物に便利な都市に住む。農村で教育を受けて、都市に向かう。そんな循環のなかで、人生のハブ的な機能を東川町に持たせることが、活性化になるのではないかと思います」

移住や交流の活性化に関しては、海外にも目が向けられており、今年秋には、国内初の町立日本語学校が開校となる。八〇〇〇人規模の町で、と疑問を抱かれるかもしれないが、実は中国、台湾、ベト

ナム、ウズベキスタンなど、多様な国々からの留学生を長年にわたって受け入れてきた実績がある。

「日本語を学ぶなかで、未来を一緒に考えていこうと。東川で過ごした生徒が将来、日本と自分の国を結びつけてくれるかもしれない。東川の特産品を輸入するビジネスが生まれることだってあります」

加えて、将来的には介護福祉士や家具のデザイナー育成のための講座を設けたいと話す松岡氏のビジョンは広がる。

「東川町で学んで、都会や海外にまた戻る。そのしくみが定着すれば、必ず数年は何百人かの若い人たちがここに滞在する。なかには定住する人も出てくるでしょう。そういう循環が起きてくれれば、ありがたいなと考えています」

実現に向けては、様々なハードルが横たわるだろうが、松岡氏は大らかな笑顔を見せた。

「町の紹介の際、いつもする自慢話があるんです。東川には上水道がない、鉄道がない、国道がない。でも、本州には絶対がない、大きな夢のある道がある。『北海道です』その言葉に北海道の、そして

一八九四年に原野を開拓して始まった町の歴史を思い出す。その後、道なき道に「写真の町」の看板を掲げて文化を育み、人の心が耕されてきた。今、町長や役場の職員、そして移住者を含む住民たちが蒔いている新たな種が、未来にもたらす実りが楽しみでならない。

二〇一四年に完成した東川小学校は、北海道出身で世界的に活躍する彫刻家・安田侃氏のアートが学内外に飾られているほか、自然光がたっぷり入る開放的かつ先進的な構造。子供をこの学校に通わせたいと、移住を考える人も増えているという。



守  
破  
創  
対談

若くして難関の「ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール」で日本人として初優勝し、多くの音楽ファンから愛されている辻井伸行氏。ツアーをはじめ、ハードなスケジュールをこなしながら、音楽に対する真摯な姿勢を常に貫いている彼に、ピアニストとして日頃から考えていること、そして、今後の計画や展望など、演奏に懸ける思いを伺った。



日本銀行政策委員会 審議委員

# 佐藤健裕

Takehiro Sato

1961年大阪府生まれ。1985年京都大学経済学部卒業後、(株)住友銀行入行。1999年モルガン・スタンレー・ジャパン・リミテッド入社。モルガン・スタンレー証券(株)エグゼクティブ・ディレクター日本経済担当チーフエコノミスト、マネージング・ディレクター日本経済担当チーフエコノミスト、経済調査部チーフエコノミスト 兼 債券戦略部長などを歴任し、2012年モルガン・スタンレー MUFJ 証券(株) マネージング・ディレクター経済調査部チーフエコノミスト 兼 債券調査本部長。2012年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

## クラシック音楽の魅力を多くのの人に伝えたい



ピアニスト

# 辻井伸行

Nobuyuki Tsujii

1988年東京生まれ 幼少期からピアノの才能を発揮し、10歳でオーケストラと共演してデビューを飾る。2007年にCDデビュー。2009年6月に、アメリカのテキサス州フォートワースで開催された「第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール」で日本人として初めて優勝。以後、日本を代表するピアニストの一人として国際的に活躍している。アシュケナージ、ゲルギエフなど、一流の指揮者たちとも数多く共演。幼少の頃から作曲を始め、近年は映画やドラマのテーマ曲も手がけている。2011年には、自作を収録したディスクをリリースしている。

美しい音色で聴き手を包み込む独特な世界

**佐藤** 七月にかけてシヨパンとリストによるリサイタル・ツアーを日本各地で行っていらっしゃいました。ツアーが終わりたばかりと伺いましたが、そのリサイタルでは、リスト(注1)のソナタ(注2)も演奏されておられました。私は、この曲が大好きで、さまざまな演奏を聴いてきましたが、辻井さんが弾くリストのソナタを聴いた記憶がありません。もしかすると初挑戦ですか。

**辻井** 初挑戦の曲です。

**佐藤** やはりそうでしたか。私の独断と偏見では、辻井さんの演奏の特徴は音色にあると思います。音の透明度の高さ、そして、音の美しさは他のピアニストと比較してずば抜けています。曲の解釈については、とても温かいと言いますか、全ての人を包み込んで幸せにしてくれるような独特な世界があると思います。リストのソナタの演奏で、その方向性の世界を出していくのは難しいかと思いました。



注1 / フランツ・リスト  
(一八二一〜一八八六) リスト  
ガリー生まれのピアニスト、  
作曲家。ピアノとして  
は、超絶技巧の持ち主と  
して、その貴公子然とした容  
貌と合わせて、欧州中を熱  
狂させた。作曲家としては、  
当初は装飾的で技巧の目立  
つ作品が多かったが、徐々  
に内省的な作風に転換。最  
晩年には、20世紀の現代  
音楽を予感させる地点にま  
で達した。

注2 / ピアノ・ソナタ 口短  
調 一八五二〜五三年作曲。  
単一楽章の中に多楽章から  
なるソナタ形式を盛り込ん  
だ、演奏時間約30分のリス  
トの代表的ピアノ作品。  
演奏技術的に難しいだけで  
なく、多彩な感情と超自然  
的な力が感じられるような  
表現(デモーニッシュ)が  
求められる難曲。

注3 / 佐渡裕 (一九六一生)  
日本の指揮者。兵庫県立芸  
術文化センター芸術監督  
シエナ・ウインド・オーケ  
ストラ首席指揮者を務め  
る。二〇一五年九月からは、  
オーストリアを代表する、  
一〇七年の歴史をもつト  
ンキュンストラーク管弦楽団  
音楽監督に就任。

**辻井** 僕が弾くときにいつも心

がけていることは、作曲家がど  
ういう音を求めて、どういう気  
持ちになって書いたのかを、楽  
譜から読み取って表現すること  
です。リストという作曲家は、  
よく知られているシヨパンと同  
じ時代の人ながら対照的な存在  
です。詩情溢れるピアノ曲が作  
品のほとんどを占めるシヨパン  
に対して、リストはピアノ曲だ  
けでなくさまざまなタイプの曲  
を書いていきます。聴衆を唯然と  
させるような超絶技巧系のピ  
アノ作品は、ノリと勢いで弾きき  
ることもできますが、ソナタは、  
高い演奏技術だけでなくさまざま  
な要素が盛り込まれた大作で  
あり、体力と集中力が不可欠で  
す。

**佐藤** リストのソナタは最初か  
ら最後まで緊張感と高揚感にあ  
ふれていますよね。

**辻井** ソナタは、以前から弾き  
たいと望んでいた作品でした。  
しかし、この曲は今まで弾いて  
きたリストの作品の中でも難し  
く、リサイクルで披露する水準  
まで仕上げるのに苦労しまし  
た。

**佐藤** 辻井さんの音色の美しさ

は、音に対する非常に鋭い感覚  
から来ているのではないかと思  
います。僭越な言い方で恐縮で  
すけれども、やはり尋常ではな  
い耳だと感じます。ピアノの音  
は、弾いていても自分の音が聴  
こえていない人が結構多いと聞  
きます。ところが、辻井さんの  
場合は、ご自分が出している音  
をよく聴かれているなど強く感  
じます。

**辻井** 響きを聴きながら演奏す  
るのはとても大切なことです  
し、自分の出した音を出して、  
そして楽しんで演奏することが  
大事だと思っています。美しい  
弱音を出すのは本当に難しいの  
ですが、そういう音が出せると、  
自分の演奏にも幅広い表現力が  
つくといつも思っています。

### 印象に残った ウィーン・デビュー

**佐藤** 今年は、五月から三二日  
間に及ぶ欧米ツアーがあり、い  
ずれも大盛況だったと伺ってい  
ます。特に印象に残ったことは  
ありますか。

**辻井** ウィーンでのデビューを

ウィーン・フィルのニューイ  
ヤー・コンサートの会場として  
有名なムジークフェラインザ  
ールで、さらに中学生時代からお  
付き合っていたらいてる指揮者  
の佐渡裕(注3)氏が指揮する  
トンキュンストラーク管弦楽団  
と共演できたことです。まさか、  
ウィーン・デビューをあの素晴  
らしいホールでできるとは思っ  
ていなかっただけに、うれし  
かったです。

**佐藤** トンキュンストラーク  
弦楽団の演奏を、私もウィーン  
のムジークフェラインザールで  
昔聴いたことがあります。学生  
時代の貧乏旅行でお金がなく、  
ホール後方の安価な立ち見席で  
聴きました。それでもホールの  
響きが恐ろしく柔らかくて、包  
み込むような響きですよね。

**辻井** 素晴らしいホールです。  
その一方で、僕は、音楽の本場  
と言われるウィーンの方たち  
が、どんな気持ちで演奏を聴い  
ているのだろうと思って演奏し  
ていました。そうしたら、終わっ  
たら熱い拍手がわき起こったの  
で、本当に驚きました。

### 国によってそれぞれ 違いがある聴衆の反応

**佐藤** 聴衆の反応に関しては、  
ウィーンに限らず、海外の聴衆  
の方々と国内の聴衆の方々と、  
何か違いはあるのでしょうか。

**辻井** やはり反応は違います。  
日本の聴衆の方たちは温かく、  
アメリカの聴衆の方たちは熱狂  
的で、スタンディングオベー  
ションをして、ブラボーといっ  
た歓声が飛び交ったりします。



注4／ヴァン・クライバーン  
国際ピアノ・コンクール  
一九六二年より四年ごとに  
開催される国際的なピアノ・  
コンクール。

注5／ヴァン・クライバーン  
(一九三四～二〇一三)ア  
メリカのピアノリスト。東西  
冷戦下の一九五八年、当時  
の共産圏の盟主ソビエト連  
邦が国家の威信をかけて開  
催した第一回チャイコフス  
キー国際ピアノ・コンク  
ールで並み居るソビエト連邦  
のピアノリストを抑えて優勝  
し、一躍アメリカの英雄と  
なった。

注6／ワレリー・ゲルギエフ  
(一九五三生) ロシアの指  
揮者。現在、ロシアのサン  
クトペテルブルクのマリイ  
ンスキー劇場芸術総監督  
ロンドン交響楽団首席指揮  
者を務めるだけでなく、世  
界中のオーケストラや歌劇  
場からのオファーが絶えな  
い人気指揮者。

注7／ミュンヘン・フィルハー  
モニー管弦楽団、ドイツ・  
ミュンヘンに一九九三年に  
創設のドイツ有数のオーケ  
ストラ。二〇一五年九月よ  
りゲルギエフが首席指揮者  
に就任する。

注8／セルゲイ・ラフマニ  
フ(一八七三～一九四三)  
ロシアのピアノリスト、作曲  
家。並外れた大きな手を持  
ち、卓越したピアノリストと  
して活躍する傍ら、ロシア  
らしい抒情的なメロディイ  
と憂鬱に満ちた響きを兼ね  
備えた作品を残した。

注9／ピアノ協奏曲第二番二  
短調作品番号三〇 後述の  
ピアノ協奏曲第二番と並  
ぶラフマニフの代表作。  
アメリカへの演奏旅行で  
披露するために作曲され

ヨーロッパの聴衆の反応で思い  
出すのは、二〇〇九年、ヴァン・  
クライバーン国際ピアノ・コン  
クール(注4)の優勝後にドイツ  
で初めて演奏会をしたときのこ  
とです。二〇〇〇席くらいの小さ  
なホールでしたが、ドイツのお  
客様は、当初、無名に近いピ  
アリストが、どんな演奏をするの  
か厳しく品定めをするように見  
つめているのを感じました。舞  
台に出た瞬間、その空気が伝  
わってきて、プレッシャーを感  
じました。演奏をしていくうち  
に、徐々に皆さんが集中して聴  
いてくださり、終わってからは  
心から拍手をしてくださったの  
で、うれしかったです。

佐藤 辻井さんはライブの人と  
いうイメージがあつて、お客さ  
んの反応がいいとどんどんノリ  
にのつてくる感じがします。あ  
くまでも私の印象ですけれども  
……。

辻井 演奏会は、いつも一回  
きりのものですので、お客様  
に少しでもいいものを聴いて  
いただきたいと思います。  
二〇〇九年に受けたコンクール  
に名前が冠せられている名ピ

アリストのヴァン・クライバーン  
(注5)さんに亡くなる少し前  
にお会いしたとき、彼が「クラシッ  
ク音楽を生で皆さんに聴いてい  
ただいて、少しでもコンサート  
に足を運んでもらえるような、  
そういうピアノリストになりな  
さい」と語ってくれた言葉が胸に  
残っており、そうありたいと  
常々願っています。

佐藤 三二日間の欧米ツアーと  
聞きますと、非常にハードだと  
想像します。ツアーをこなすに  
は、それなりに体力も必要だと  
思いますがいかがでしょうか。

辻井 演奏をする上で健康管理  
はすごく大事です。僕の場合は、  
時差ぼけがないものですから、  
助かっています。

佐藤 それは不思議ですね。

辻井 移動が大変なときもあり  
ますが、よく寝て、よく食べて、  
よく運動して、大変だと思つた  
ことは一度もありません。い  
つも楽しんでツアーをしています。

佐藤 とところで、欧米ではクラ  
シック音楽が生活の一部になっ  
ていると思います。一方、日本  
ではクラシック音楽は今でも

やや敷居が高いと思われる  
印象があります。こういった日  
本におけるクラシック音楽の現  
状について、何か感じていらっ  
しゃることはありますでしょ  
うか。

辻井 クラシック音楽は敷居が  
高いと感じて、コンサートに行  
きづらいという方も多いと思  
います。僕は、そうした方々に  
少しでも演奏会の生の雰囲気  
を味わっていただき、クラシッ  
ク音楽に興味を抱かれて、「また  
コンサートに行きたいな」と  
思っていただけのような演奏家  
になりたいと思っています。そ  
して、クラシック音楽の素晴ら  
しい魅力を皆様に伝えて、その  
ファンを増やすことができた  
らいいなと思っています。

### 協奏曲は音楽家同士の コミュニケーションが大切

佐藤 今後のご計画ですが、こ  
の秋には、巨匠ゲルギエフ(注6)  
率いるミュンヘン・フィルハー  
モニー(注7)との共演が予定さ  
れています。リサイタルで演奏  
するときに協奏曲を演奏する  
ときは、いろいろと異なる面があ

ると思います。例えば、協奏曲  
では、指揮者やオーケストラの  
演奏家の方とはタクトではなく  
て、呼吸で合わせるというお話  
を伺ったことがあります。

辻井 ピアリストは独奏で弾く  
機会が多いので、他の楽器とは  
違って孤独な感じがあります。  
協奏曲の素晴らしいところは、  
他の音楽家の皆様や指揮者の方  
と力を合わせて、みんなであつ  
た音楽をつくっていく点です。  
もちろん、オーケストラの音を  
聴きながら弾いていますし、言  
葉よりも音楽で伝えられること  
が多くあるので、音楽家同士で



©Yuji Hori



一九〇九年、ニューヨークにて作曲家自身のピアノで初演される。演奏時間約四十五分。

注10/ピアノ協奏曲第二番ハ短調作品番号一八、ラフマニノフの代表的作品として多くのコンサートで取り上げられる人気作品。演奏時間約三十五分。

注11/ベートーヴェンは生涯に三曲のピアノ・ソナタを作曲した。これらについて一九世紀後半を代表する指揮者ビュローロは「ピアノリストにとっての新約聖書」だと評した(ちなみに「旧約聖書」は、バッハ作曲「平均律クラヴィア曲集」)。後期のピアノ・ソナタとは、第二八番(第三番の五曲を指す。辻井氏は、国際コンクールにて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ中最大の規模と難易度を誇る第二九番変ロ長調作品番号一〇六「ハンマークラヴィア」を演奏して優勝している。

# 対談 守破創



は自然と、「こうやりたいんだな」とわかり合えるのです。

**佐藤** 自然にコミュニケーションをとりながら、お互いに音楽を形づくり、だんだんと盛り上げていく協奏曲の醍醐味は、客席にもしっかりと伝わってきます。

**辻井** 共演そのものも楽しいですし、オーケストラとツアーを重ねると、皆さんと仲よくなり、どんどん一体化してきて、いい演奏ができます。ツアーの最後のほうになると、もう終わってしまうのかという寂しさを感じますし、「またぜひやりたいね」と皆さんがおっしゃってくだ

さったりすると本当にうれしいですね。

## 難曲であればあるほど 挑戦心が湧いてくる

**佐藤** 来春再挑戦されるラフマニノフ(注8)のピアノ協奏曲第三番(注9)は私が好きな曲です。長い曲である上に、ピアノのソロ・パートは、全曲を通じてほとんど休みがなく、技術的にも難しい作品であり、辻井さんがしばしば取り上げている同じ作曲家の第二番(注10)以上に並外れた気力、体力が必要なように私には思えます。

**辻井** ラフマニノフのピアノ協奏曲第三番は、昔から弾きたかった曲の一つで、昨年初めて取り組みました。いざ始めると、技術的にすごく難しく、今まで取り組んだ協奏曲の中で一番苦労しました。

**佐藤** 辻井さんの口から「難しい」という言葉が出てくるので、私は少し安心しました(笑)。「難しい」という概念がそもそもないということが、お母様の本に書かれていたので。

**辻井** 小さい頃は感じませんでしたが、今は曲の難易度も徐々に高くなっています。でも、だからこそ挑戦したいという気持ちがあります。難しくしてハードルが高いほど燃えますし、これを上手に弾いて、皆様が喜んでくださるというイメージが常にあるので頑張ろうという気になります。

**佐藤** 私は、辻井さんの自作もいろいろと聴いたことがあります。作曲家として、ピアノリストとは違ったご苦労もあると思いますが。

**辻井** 作曲は小さい頃から好きでした。クラシックの曲を弾くときは、作曲家が求めているものを楽譜から読み取って楽譜どおりに演奏しますが、自分の曲を弾くときは、もっと自由な感じですね。旅行に行ったり、自然の中を散歩し、小川のせせらぎを聴いたり、風を感じたり、小鳥の鳴き声を聴いたりして、感じとったものをイメージして作曲しています。

**佐藤** 最近では、映画音楽やドラマの曲、テレビ番組のテーマ曲なども手がけていますね。

**辻井** その場合は、台本やテ

マに沿う必要がありますし、少し苦労するケースもあります。その一方、完成時には達成感があり、こうした仕事に、作曲を通じて携われてよかったと感じます。

**佐藤** 辻井さんは、若くして幅広いレパートリーをお持ちですが、今後の計画、例えば、室内楽等との共演も含めて、どのようにお考えですか。

**辻井** 室内楽に関してはまだ経験が少ないので、もっと取り組みたいと思っています。ソリストとしては、ベートーヴェンの後期のソナタ、さらにはソナタ全曲(注11)もできたらと思っています。もちろん五曲のピアノ協奏曲もすべて取り上げたいです。ベートーヴェンやショパンをはじめピアノ曲はきりがなほどあります(笑)。若い頃ではないと弾けない曲や、体力が必要な大曲は今のうちにレパートリーとして取り組んでおきたいと思っています。

**佐藤** 「世界の辻井」として、今後ますますのご活躍、ご発展を、心から期待しています。本日はありがとうございます。



# お金の源

素材の歴史と作り方

第3回

## 金貨

### 二つのうちの二つ

世の中に金属はたくさんありますが、ほとんどのものはただの灰白色に見えます。その中で、金と銅の二つだけは、はっきりとした色を持っています。金は、色相としては黄色ですが、それに金属光沢が加わることによって、あの荘厳な感じを私たちに与えてくれるのです。

### 日本における鉱山開発と金属製錬の始まり

古代の日本が、中国や朝鮮半島からの文化の影響を強く受け

四回にわたって「銅」、「銀」、「金」、「紙」といった貨幣の素材や製作方法に焦点を当ててわが国の貨幣の歴史を紹介する「お金の源—素材の歴史と作り方」。

第三回は、古代から現在に至るまで、その輝きで人を魅了し続けてきた「金」を取り上げます。「砂金」から金塊状の貨幣への移行の歴史、時代劇でおなじみの江戸時代の小判の黄金色の秘密、そして、日常使いの「金貨」が日本から名実ともに消えるまでを、国立歴史民俗博物館の齋藤努先生にご執筆いただきました。

国立歴史民俗博物館 教授 齋藤 努

ていたことは、よく知られているとおりです。特に七世紀から八世紀には、遣隋使や遣唐使などの他、朝鮮半島からの渡来系の人たちが多くの新しい文化をもたらしました。鉱山の開発や金属製錬の技術も、日本でさまざまな制度を整え、国家としての力を高めようという、当時の機運の中で伝えられたものの一つです。

律令国家体制を整備するにあたり、青銅の錢貨である「富本錢」や「皇朝十二錢」の他、天平宝字四年（七六〇）に、日本で初めて「開基勝寶」という金貨が

作られました。これは、東大寺の盧舎那仏像（奈良の大仏）建立時の金めっきのために、初めて砂金が陸奥国から献上された天平二十一年（七四九）から一一年後にあたります（注1）。開基勝寶は、宮内庁御物として一枚、東京国立博物館所蔵資料（重要文化財）として三二枚の計三二枚が現存しています。

### 中世の砂金

皇朝十二錢は平安時代中期の乾元大寶をもって終焉を迎え、中世になると、中国から輸入した渡来錢や、それらを模して日

さいとう・つとむ  
1961年神奈川県生まれ。東京大学理学部、同大学院理学系研究科修了。理学博士。2009年4月より国立歴史民俗博物館研究部教授を務める。美術品・工芸品・考古遺物などの歴史資料を対象として自然科学的手法を用いて調査を行い、人文科学的な研究結果とあわせることによって、原料の流通や人の交流、使用されていた技術などについて研究を行っている。また、伝統技術に関する実地調査や再現実験なども実施している。専門分野：文化財科学、分析化学。主な著書：『金属が語る日本史—錢貨・日本刀・鉄炮—』歴史文化ライブラリー 355（吉川弘文館）、『考古調査ハンドブック2 必携 考古資料の自然科学調査法』（監修・執筆：ニューサイエンス社）、『江戸期小判などの色揚げに関する自然科学的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集（開館30周年記念論文集Ⅱ）。

本で私的に铸造した模铸錢が流通するようになります。この時期には、家や土地の売買などの高額取引に銅錢が使用されることもよくありました。穴にひもを通してくくった「錢ざし」が、壺の中に大量にまとめられたものが、遺跡から出土しています。その一方で、奈良時代以降は、砂金が素材としてだけではなく、重要な取引手段としても使用さ

注1  
日本で初めて、陸奥国小田郡（現在の宮城県遠田郡涌谷町）で金を産出した。献上された砂金は九〇〇両（約三キロ）。





沙金筒 (草間直方『三貨図彙』(1815)より) 近世砂金裏 (右)、仙台家砂金裏 (左) (近藤守重『金銀図録』(1810)より) (提供: 日本銀行金融研究所貨幣博物館)

## 戦国時代の 貴金属貨幣

室町時代末期から安土桃山時代にかけて、部下の論功行賞に充てたり、鉄炮のような高額の武器類を購入したりする必要から、少量で高い価値を持った貨幣が望まれるようになります。そこで戦国武将たちは鉱山開発を盛んに進めるようになり、金や銀の産出量が大幅に増加しました。

その背景には、鋳物製錬技術の進歩があります。それまで、金はほとんど砂金として採取されていたため、微細な粒子までは採り切ることができませんでしたが、石見銀山(島根県大田市)に伝来した「灰吹法」が広く普及したことによって、砂金のみではなく、採掘した鉱石の中に含まれる「山金」の採取が可能となりました(注2)。

これに伴い、それまでの取引手段だった砂金に代わって、山金を製錬し品質を揃えた、金塊状の貨幣が誕生します。江戸時

代の金貨の原型と見なされるものとしては「蛭藻金」や「譲葉金」があり、いずれも莫産目のような横向きの凹みが付けられています。

## 領国貨幣

各戦国武将によって作られた領国貨幣の主なものとしては、越後上杉氏の「天正越座金」や甲斐武田氏の「甲州金」があります。これらには、江戸時代の金貨にも見られるような「極印」が打たれています。また、甲州金には四進法という特別な額面体系が設けられていましたが、そのうち、「両」「分」「朱」の単位は江戸時代の幣制にも採用されています。

この他、豊臣氏が賞賜用に発行した「天正大判」(その一つである「天正長大判」は、現存する金貨の中で表面積が世界最大とされています)、秀吉が大坂城内に備蓄したといわれる「分銅金」、関東に移封された徳川氏が製造させた「武蔵墨書小判」な



譲葉金/小判の原型のような形で、水草の蛭藻に似ている (縦約8cm) (提供: 日本銀行金融研究所貨幣博物館)



譲葉金/蛭藻金よりも大きく、大判の原型のようなものと思われる。形が樹木の譲葉の葉に似ている (縦約14cm)



天正長大判/天正大判は天正16年(1588)から作られるようになり、製造時期によって古大判(枠が菱形の桐極印が打たれたものを菱大判という)、写真の長大判(縦約17cm)、大仏大判に分類される

どがあります。

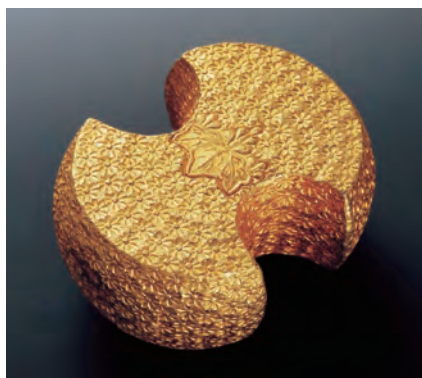
## 江戸時代の幣制

江戸幕府が金貨・銀貨・銅銭の三種類の貨幣からなる「三貨制度」を確立したのは寛永十三年(一六三六)でした。これら

注2 「灰吹法」については、本誌二〇一五年夏号の「第二回 銀貨」参照。

の貨幣はそれぞれ別個の額面体系を持っており、公定の交換比率はあったものの、実際には両替商が日々の時価相場によって取引を行っていました。これは、現代に置き換えると、円とドルとユーロが、一つの国の中で混在して使われているようなものです。

江戸時代を通じて、幕府はしばしば貨幣の品位改定を行いました。小判は純金ではなく、金と銀の合金でできていますが、その時々金の銀産出量や経済状況によって、金と銀の比率や小判そのものの重さが変わりました。



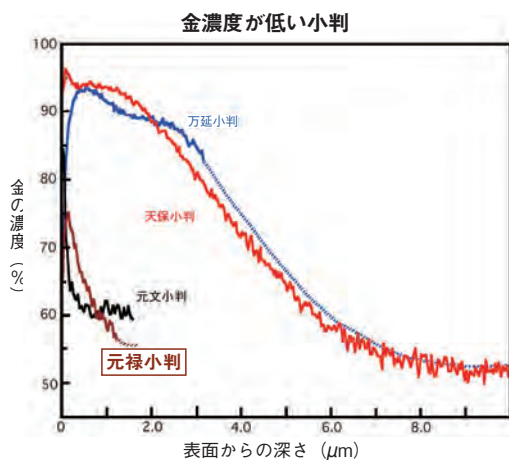
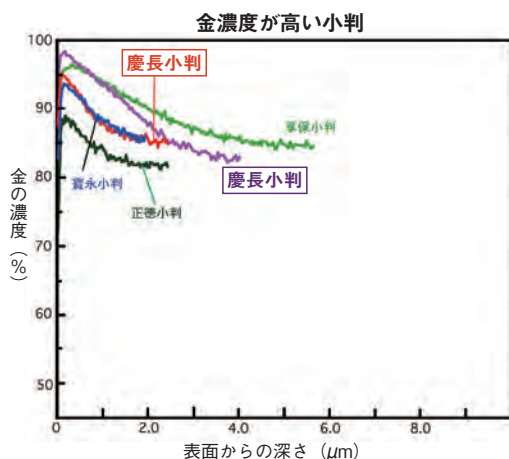
分銅金（桐）極印、菊花地紋

（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

た。金銀比率を鑑定する簡易的な方法として、それらが正確に分かっている試金棒を、那智黒（基石に使われる那智産の上質な黒石）でできた試金石にこすりつけ、擦り痕の色を小判のものと同じくするというやり方がとられました。

### 小判の色付

江戸時代に発行された小判のうち、一番初めの「慶長小判」は金が八七%近く含まれていますが、その次の「元禄小判」には五七%しか含まれていません。実際にその比率で小判を再現製作してみると、わずかに黄色みを帯びた白っぽい金属にしかならないことが分かりました。しかし、実物の小判はいずれも黄金色に輝いています。私たちは、日本銀行貨幣博物館のご協力で、異なる時期の小判を「オージェ電子分光分析法（注3）」という方法で調べてみました。すると、表面では金の濃度が極めて高く、おおむね九〇%以上になっています。



江戸時代の早い時期の小判（慶長小判から元文小判）は金濃度の高い部分の層が薄い、江戸時代の後の時期（天保小判・万延小判）になるとその層が厚くなっている（図作成：齋藤努）

ますが、内側に行くほど金の濃度が低くなっていき、〇・四から八マイクロメートルの深さで所定の金・銀比率になっていました。また、これが慶長小判の段階から見られることや、江戸時代の前半と後半とで深さに違いがあることもわかりました。以前から、文政小判以降に発行された小判は、肉眼的にも、明らかに美しい金色になっており、それ以前のものとは技術的に違いがあるのではないかと言われていました。この分析結果は、それと整合していることになり

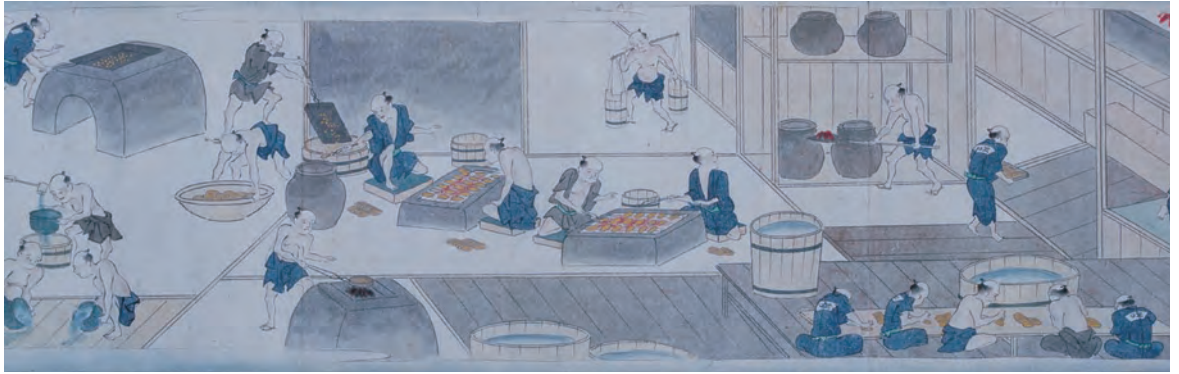
ます。つまり、小判が金色に見えるのは、その最表面だけ金の割合が多くなっているからなのです。江戸時代に、どのようにしてこんなことができたのでしょうか。

江戸時代の金座絵巻や小判所絵図には「色付場」の様子が描かれており、また金座の製造マニュアルである『金位并金吹方手続書』には、そこで使用する六種類の薬品が記載されています。これらに従って、実際に小判の再現製作を試みたところ、白っぽかった金属が見事に、黄金色に姿を変えました。これ

#### 注3 オージェ電子分光分析法

試料に電子線を照射すると、さまざまな電子や電磁波が放出される。そのうちのオージェ電子という電子のエネルギーを解析することで、物質の最表面層に存在する元素を同定する方法。アルゴン原子を吹き付けて表面をわずかながら分析することから、深さ方向における元素の濃度変化が分かる。





金座絵巻に描かれた色付工程の様子／色付薬を塗り、炭火で加熱し、水で洗い落とす。これを二回繰り返す  
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

は、薬品によって銀だけが溶けて除かれ、結果として金が表面に残ったために起きた現象です。

この技術は「色付」あるいは「色揚」と呼ばれ、薬品の処方は多少異なるものの、現在の金工でも使われています。徳川家康が金貨製造に当たさせた後藤庄三郎(注4)光次は、もともと室町幕府で刀装具などを手掛けていた彫金師の家筋にあたりますので、あるいは、そこで使っていた技術を応用したのかも知れません。ちなみに、後藤庄三郎光次が小判を作った「金座」跡にあるのが、現在の日本銀行本



色付の前(右)と後(左)の復元小判／元禄小判(金の濃度：五七%)をモデルにして作成したもの  
(提供：国立歴史民俗博物館)

店(東京都中央区日本橋本石町)です。

### 金貨あるいは金属価値に裏付けられた貨幣の終焉

明治政府も、江戸幕府同様に金を貨幣の材料として用いました。欧米にならった金本位制を目指し、明治四年(一八七二)に「新貨条例」を發布、金貨を本位とし、純金一・五グラム＝一圓とする新貨幣を「圓(円)」と定め、これに基づく金貨を製造しました。その後、明治三十年(二八九七)制定の「貨幣法」において純金〇・七五グラム＝一圓と改定し、新しい金貨を製造しました。

金を貨幣価値の基準とする金本位制の下、日本では金貨(および金貨との兌換を保証する紙幣)が製造され続けました。しかし、昭和七年(一九三二)銘の二十円金貨を最後に本位貨幣としての金貨発行は終了し、また、中央銀行による金融政策に

よって貨幣価値が決まる「管理通貨制度」に移行しました。

こうして、日常から金貨は消えていきますが、第二次世界大戦後の「ブレトン・ウッズ協定」における、純金一トロイオンス(約三二グラム)＝三五米ドル、一米ドル＝三六〇円という固定為替相場を通じて、円の価値は、まだ金と結び付いていました。しかしこの結び付きも、昭和四十六年(一九七一)、米国による金とドルの交換停止(「ニクソン・ショック」とその後の変動相場制への移行を経て断ち切られることとなります。そして、「圓」を正式な通貨単位とし、金貨を本位貨幣とする「貨幣法」が、昭和六十三年(一九八八)に廃止されたことで、日本における金属価値と貨幣価値とを結び付けた歴史―飛鳥時代の無文銀銭から見ても千年を超える歴史―が名実ともに終わりを迎えたのでした。今や、金貨は、記念貨幣等で時たま目にするだけのものとなっています。

注4 後藤庄三郎 金工・後藤徳乗の門人で、江戸幕府金座の御金改役(金座の統轄として金貨などを鑑査)。初代光次(一五七―一六二五)以後代々庄三郎を名乗り御金改役を世襲。



昭和7年銘 20円金貨／製造されるものの、実際に市中に流通することはなかった。発行枚数は不明。現存枚数は知られている限りで70枚程度。  
(提供：独立行政法人造幣局)

国際局「国際収支課」の仕事

# 日本の「家計簿」——国際収支統計

日本銀行は金融経済の実態を適切に把握するために、さまざまな統計を利用するばかりでなく、自らも各種の金融・経済統計を作成しています。今回は、そのうちの一つ、国際局国際収支課が集計・作成する「国際収支統計」を取り上げます。

モノを輸出・輸入したり、海外に工場をつくったりすれば、日本と海外との間でお金のやりとりが発生します。その収支（一定期間内でお金の受け取りと支払いの差額）を示した統計が「国際収支統計」です。各種の経済分析や研究、そして経済政策の運営において重要な統計データとして利用されますが、どのように統計がつけられているのでしょうか。国際収支統計の基本的な仕組みと作成の舞台裏を、分かりやすくご紹介しましょう。

## 日本の「家計簿」のつくり方

「国際収支統計」は、ある国と外国との間で行われる財貨、サービス、証券などの経済金融取引や、それに伴って生じるお金（決済資金）の流れなどを体系的に記録した統計表のことです。国際局国際収支課国際収支統計グループ長の森下謙太郎企画役は「モノや資金の外部との出入りを記録するという意味では、一国の『家計簿』や『現金出納帳』みたいなものと言えるかもしれません」と話します。

「国際通貨基金（IMF）の加盟国（二〇一五年七月現在で一八八カ国）には、協定により

国際収支に関する情報の提供が義務付けられています。同時に、日本の場合、外国為替及び外国貿易法（外為法）において、財務大臣が定期的に統計を作成し内閣に報告することが定められており、日銀は、財務大臣の委任を受けて、日本と外国との経済金融取引を集計・記録した国際収支統計の作成を担っているのです」

日本と外国との経済金融取引は、大きく「経常取引」と「金融取引」に分けることができます。

「経常取引」は、例えば、商品を外国から輸入したり、海外旅行でホテルに宿泊したりする時に発生する取引のことで、利子や配当

■平成 26 年度中国際収支状況（速報）

経常収支	78,100
貿易収支	-65,708
サービス収支	-28,102
うち旅行収支	2,099
第一次所得収支	191,369
第二次所得収支	-19,459
資本移転等収支	-2,699
金融収支	137,492
直接投資	126,974
証券投資	50,166
金融派生商品	45,280
その他投資	-87,848
外貨準備	2,920

（単位：億円）

金の受け払いも経常取引に含まれます。一方、「金融取引」とは、例えば、日本の企業が外国に現地工場をつくったり、外国の銀行から借入れをして何年かかけて返したりする取引のことです。国際収支統計では、こうした対外的な経常取引を「経常収支」に、対外的な金融取引を「金融収支」に計上し、それら以外の取引（対外的な無償援助など）を「資本移転等収支」に計上することになります（注）。

（注）ここで言う「日本」と「外国」の区別の基準は、国籍等によるものではありません。日本の国際収支統計は IMF の「国際収支マニュアル（Balance of Payments International Investment Position Manual）」に準拠していますが、同マニュアルでは、ある国に拠点を持ち、原則一年以上の期間にわたって経済活動を行う個人・法人を、その国の「居住者」と定義しています。この定義によると、外国企業の日本支店などは日本の「居住者」と見なされます。外国企業の支店と日本国内の企業や日本人との取引は国際収支統計には計上されません。「居住者」と「居住者」の取引に該当するからです。国際収支統計に計上されるのは、日本から見て「非居住者」となる個人・法人と、「居住者」の個人・法人との間の取引です。国際収支統計の計上方法などについて、詳しくは日銀ホームページ上の解説も参照ください。





## 「貿易立国」から「爆買い」へ？ 日本の「稼ぎ方」が分かる

日本の国際収支統計について、具体的にみてみましょう。「貿易立国」という言葉がよく使われるわが国では、商品の輸出入である「貿易収支」に関心が集まり、それにサービスマネージメントを加えた「経常収支」も注目されます。

日銀国際局国際収支課が集計・作成し、財務省国際局為替市場課を通じて二〇一五年五月十三日に公表された、「平成二十六年 度中国国際収支状況（速報）」を見ると、「経常収支」は七兆八一〇〇億円の黒字となっています。ただ、一方で、「貿易収支」は六兆五七〇八億円の赤字となっています。これは、どういう状況なのでしょう。

「よく見ると、海外投資による利子や配当の受け払いを計上する『第一次所得収支』が大幅な黒字となっています。そのため、差し引きで経常収支が黒字になっているのです。もっとも、投資による収益が経常黒字の要因（稼ぎ手）となったのは、ここ最近のことです。日本は戦後、原材料を輸入し、加工品を輸出して稼ぐ貿易立国として経済成長してきました。そんな日本の

『稼ぎ方』が変わりつつある状況を、国際収支統計は映し出しています」（森下さん）

一四年度中の国際収支統計を細かく見ると、さらに面白いことが分かります。経常収支の中の「サービス収支」は二兆円以上の赤字となっていますが、さらにその内訳項目である「旅行収支」は黒字となっています。

旅行収支は、訪日外国人が宿泊や飲食などに使ったお金から、日本人の旅行者が宿泊や飲食などに使ったお金を差し引きます。その結果、一三年度は五三〇四億円の赤字だったのが、一四年度には二〇九九億円の黒字に転じました。国際収支統計で旅行収支が黒字になるのは一九五九年以来、五五年ぶり。森下さんはこう言います。

「昨年来、訪日外国人の増加や中国からのツアー客の『爆買い』が注目されましたが、そうした動きが統計でも確認できるということです。私たちが国際収支統計の作成に際しては、正確を期することは当然のことですが、統計が日本のあらゆる対外経済金融取引を的確に把握しているかを常に検証し、見直すことも求められています」

### 多種多様な大量の報告書を基に 統計データを積み上げる

では、国際収支統計は、具体的にどのような集計・作成されるのでしょうか。

「貿易収支」は、財務省が作成・公表する

貿易統計（通関統計）を基礎資料とし、国際収支統計の作成基準等に合わせ調整します。

「旅行収支」は、出入国管理統計や観光庁が作成・公表する調査結果等からデータを収集し、訪日外国人・出国日本人の一人当たり消費額、入国者・出国者数等から計数を推定します。

それら以外の収支は、原則として、対外的な取引ごとに提出される各種報告書に基づいて作成します。各収支について集計した統計類がすでに存在するわけではなく、国際収支課の担当者が、外国（非居住者）との取引実行（発生）の時点で提出される報告書を収支の項目ごとに集計するのです。国際収支統計グループの羽鳥早苗さんはこう説明します。



上／提出された報告書の束  
左／届出等の受理風景

「国際収支課が受理する（日銀宛てに届く）大量の報告書について、一件ずつ、内容をチェックします。私は『第二次所得収支』の統計の作成を担当していますが、基本のデータ源となる報告書は月に二〇〇〇件にのほります。報告者は金融機関、一般事業会社のほか、個人の方もいらつしゃいます」

外為法では国際収支統計の作成等を目的に、対外取引の当事者に対してさまざまな報告書の提出を義務付けており、それらが送金取扱銀行等を通じるなどして日銀に書面で送られる仕組みとなっています。報告書は四〇種類以上あり、国際収支課は一日平均で一五〇〇件前後の報告書を受理します。日々、報告書の山が仕分けされ、各収支の担当者に渡ると、確認作業が始まるのです。

「一件ずつ、誤報告がないかなどをチェックし、少しでも気になる記載があれば、報告された方にはご負担をかけますが、電話で取引内容を確認させていただきます。そんな作業をコツコツと積み上げます」（羽鳥さん）

報告書のうち、中心的な存在は、「支払又は支払の受領に関する報告書」と言われるものです。これは、非居住者などとの間で実行した送金・受領について、相手先、金額、取引目的別に定められた「国際収支項目番号」等を記載し、送金・受領者から送金取扱銀行経田などで報告されるものです。送金・受領の金額が三〇〇〇万円を超える場合、個人で

もこの報告書を提出しなければなりません。

「個人の方には見慣れない記載箇所もあるはずですが。そうした方に報告書の内容を確認する際は、統計を知らなくても理解できるように分かりやすく説明したり、曖昧な言葉遣いは避けたり、丁寧な対応を心掛けています」（羽鳥さん）

また、日本の国際収支統計は円建て表示ですが、非居住者などとの間で実行した送金・受領に関する報告書では、外貨建ての表示のものも少なくありません。集計の際、円建てに換算するレートは、誰がどう決めているのでしょうか。外為法手続グループの高橋勉

主査はこう答えます。

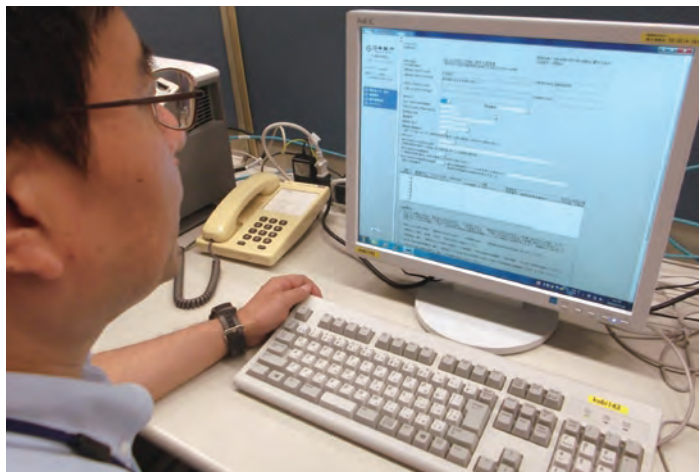
「外為法では、外国為替の取引等の報告に使用する為替レート（報告省令レート等）は、財務大臣が定める方法（計算式）に従って、日銀が公表することになっています。そのため、国際収支課では、世界約六〇カ国の通貨について円換算する為替レートを毎月算出、公表しています。こうした為替レートは、統計作成のためだけでなく、報告書の提出要否を判断するためにも必要なものです。大変重要な事務であり、正確な算出を心掛けていることは言うまでもありません」

国際収支課では、こうした報告書以外にも、事前の提出が義務付けられている届出等の受理も担っており、日々、多くの方々のご協力をいただきつつ、事務を進めています。

**使いやすく、報告しやすい  
統計を目指して**

日本の国際収支統計は、当該月の翌々月に「速報（月次）」を公表しています。作成の基本となる報告書の中には、当該月の翌月の中旬から下旬に提出されるものも多いので、国際収支課がそれらを受理して集計し、統計を作成するまでの期間は一カ月もありません。

多種多様な大量の報告書に基づき統計を短期間に作成・公表するため、国際収支課では、システムを活用しています。報告書のデータを入力すると、速報値、第二次速報値（確報



インターネット経由で報告を受理するオンラインシステム



値)に加えて、地域別の国際収支などもシステムが作成します。

また、このシステムは、報告者の負担軽減の観点からも役立っています。国際収支統計システムグループの大山明美さんによると、「〇五年一月に『日本銀行外為法手続きオンラインシステム』を導入し、外為法による報告書(四〇種類以上)はすべてインターネット経由で報告可能になりました」とのこと。

「金融機関や一般事業会社を中心に利用者は約六〇〇先に達し、日次で受理する証券投資報告(証券銘柄ごとの詳細情報を毎日提出するもの)については一〇〇%オンラインで報告されています。もともと、報告数が多い『支払又は支払の受領に関する報告書』はまだ郵送が大半を占めます。今後、オンライン利用者を増やしていくために、より分かりやすい利用案内や手続き方法の整備に力を入れているところです」

**「プラス」が「マイナス」に、「マイナス」が「プラス」に  
経済実態に合った統計に向けて**

統計作成に際して重要なのは、前述したとおり、経済金融取引を的確に把握することです。経済環境の大きな変化に伴い、国際収支統計が経済金融取引の実態を十分に把握できなくなるかもしれません。これについて、国際収支統計グループの和田麻衣子主査はこう

説明します。

「日本の国際収支統計が準拠するIMFのマニュアルは、一九四八年に第一版が公表されました。その後の経済環境の変化や推計方法の進化などを踏まえて、マニュアルは国際間の取引が統計に適切に表現されるように適宜改訂されており、現在は二〇〇八年に公表された第六版が最新のものとなっています。それを受けて、日本の統計も一四年一月の取引計上分から最新のマニュアルに基づいて作成・公表されています」

今回の見直しでは、一九九〇年代以降のアジア通貨危機などの経験を踏まえ、国際金融関連取引の把握に力点を置いています。このため、関連項目の見直しなどを実施したほか、統計の表記方法の変更も行っています。例えば、項目の見直しとして、通貨別・部門別の項目を拡充・細分化するなど、バランスシート項目の充実が図られています。加えて、金融関連取引について、従来は資金の流出入に着目し、流入をプラスの符号で、流出をマイナスの符号で表記していたものを、見直し後は、資産・負債の増減に着目し、資産・負債の増加をプラス、減少をマイナスで表記するように変更しました。

この結果、統計表の資産(対外投資)側の符号が従来と逆になりましたが、「資産・負債の残高の増減が国際収支の動きと同じになるので、その意味では分かりやすくなります」

た」と和田主査は言います。

「的確な統計を作成するだけでなく、ユーザーフレンドリーという視点も必要です。統計は使われてこそ意味を持ちます。精度や信頼性と同時に、データの使いやすさや説明の分かりやすさも含めて、統計の品質向上を図っていく必要があると思っています」

国際収支課のスタッフは、マニュアルの改善を検討するIMF国際収支委員会やその下部組織での議論にも参画しており、同委員会が一九九二年に発足した当初から、世界各国のメンバーと国際収支統計の品質向上について意見交換しています。

**今後も重要性の高まる国際収支統計**

国境を越えた経済活動が拡大する中で、今後、国際収支統計の重要性は、より一層高まることでしょう。日本の国際収支統計は、実に多くの方々の協力を得て作成されていますが、その中核を担う国際局国際収支課への期待も、より一層高まるはずですが、



国際収支マニュアル (IMF) 等



# 日本銀行のレポートから

日本銀行では、年4回（1月、4月、7月、10月）、全国32支店の支店長などが本店に集まり、総裁以下全役員と「支店長会議」を開きます。支店長会議の場では、全国の支店長などが、経済指標の分析や企業等への面談調査等を通じて収集した情報をもとに、各地域の経済金融動向等について報告・討議します。こうした分析・情報に基づく各支店などからの報告を支店長会議にあわせて集約したものが「地域経済報告」（さくらレポート）です。全国を9地域に分け、景気情勢に関する報告を集約した「地域からみた景気情勢」と、その時々タイムリーなトピックを採り上げ企業等の生の声を収集・整理した「地域の視点」、全国9地域の金融経済概況、参考計表で構成されています。

\*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。<http://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/>

## 「地域経済報告」（さくらレポート）

二〇一五年七月「抜粋」

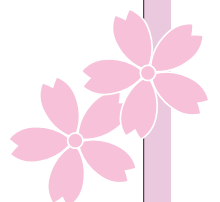
### I. 地域からみた景気情勢

各地の景気情勢を前回（一五年四月）と比較すると、八地域（東北、北陸、関東甲信越、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）で、景気の改善度合いに関する判断に変化はないとしているほか、北海道からは、生産の増加などを踏まえて判断を引き上げる報告があった。

各地域からの報告をみると、内外需要の緩やかな増加を反映して生産が持ち直している中で、雇用・所得環境が着実な改善を続けていること等を背景に、全ての地域で、「緩やかに回復している」、「回復

	【15/4月判断】	前回との比較	【15/7月判断】
北海道	一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
東北	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
北陸	回復している	➡	回復している
関東甲信越	緩やかな回復を続けている	➡	緩やかな回復を続けている
東海	着実に回復を続けている	➡	着実に回復を続けている
近畿	回復している	➡	回復している
中国	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
四国	緩やかな回復を続けている	➡	緩やかな回復を続けている
九州・沖縄	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している

（注）前回との比較の「➡」、「➤」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。





している」等としている。

**公共投資**は、東北、関東甲信越から、「緩やかに増加している」、「足もと増加している」との報告があったほか、近畿、四国から、「高水準で横ばい圏内の動きとなっている」等の報告があった。一方、五地域（北海道、北陸、東海、中国、九州・沖縄）からは、「高水準で推移しているものの、減少している」等の報告があった。

**設備投資**は、三地域（北海道、北陸、東海）から、「一段と増加している」、「大幅に増加している」、三地域（東北、関東甲信越、近畿）から、「緩やかに増加している」、「増加している」との報告があったほか、三地域（中国、四国、九州・沖縄）から、「底堅く推移している」、「持ち直している」等の報告があった。この間、企業の業況感については、「改善している」、「総じて良好な水準が維持されている」等の報告があった。

**個人消費**は、雇用・所得環境が着

実な改善を続けていること等を背景に、北海道から、「回復している」、四地域（北陸、東海、四国、九州・沖縄）から、「緩やかに持ち直している」、「持ち直している」等の報告があったほか、四地域（東北、関東甲信越、近畿、中国）から、「底堅く推移している」、「全体としては堅調に推移している」との報告があった。

大型小売店販売額をみると、多くの地域から、「堅調に推移している」、「緩やかに持ち直している」、「持ち直している」等の報告があった。

乗用車販売は、「軽自動車を中心に弱めの動きとなっている」、「改善の動きに鈍さがみられている」等の報告があった一方、「底堅く推移している」等の報告があった。

家電販売は、「改善の動きに鈍さがみられている」との報告があった一方、「底堅く推移している」、「緩やかに持ち直しつつある」、「緩やかに回復している」等の報告があった。

旅行関連需要は、「国内旅行を中

心に底堅く推移している」、「堅調に推移している」等の報告があった。この間、複数の地域から、外国人観光客が引き続き増加している等の報告があった。

**住宅投資**は、近畿から、「全体として弱めの動きとなっている」との報告があった一方、三地域（北海道、中国、九州・沖縄）から、「下げ止まっている」等、三地域（北陸、関東甲信越、東海）から、「持ち直しつつある」との報告があった。この間、東北、四国から、「高水準で推移している」、「底堅く推移している」との報告があった。

**生産（鉱工業生産）**は、内外需要の緩やかな増加を背景に、四地域（北海道、北陸、東海、近畿）から、「高水準で推移している」、「増加している」等、三地域（関東甲信越、四国、九州・沖縄）から、「緩やかに持ち直している」、「持ち直している」等の報告があった。この間、東北、中国から、「横ばい圏内の動きとなっている」等の報告があった。

主な業種別の動きをみると、電子部品・デバイス、電気機械は、「高めの操業を続けている」、「緩やかに増加している」等、化学は、「増加している」等の報告があった。一方、鉄鋼は、「操業度を引き下げている」等の報告があった。この間、はん用・生産用・業務用機械は、「減少している」等の報告があった一方、「増加している」等の報告もみられたほか、輸送機械も、「減産の動きが続いている」等の報告があった一方、「全体として高操業となっている」等の動きがみられるなど、区々の動きとなっている。

**雇用・所得動向**は、多くの地域から、「改善している」等の報告があった。

雇用情勢については、多くの地域から、「労働需給は着実な改善が続いている」等の報告があった。雇用者所得についても、多くの地域から、「着実に持ち直している」、「緩やかに増加している」等の報告があった。





## 2. 最近の消費関連企業の販売戦略・価格設定行動

### (1) 売上増強に向けた販売戦略

以上の状況のもとでの消費関連企業の販売戦略をみると、従来の低価格戦略による需要の掘り起こしに行き詰まり感が生じている先が少なくない中で、当面の売上増強を図るべく、価格よりも品質や付加価値等を重視する消費者の需要獲得に向けた施策に取り組む動きが広がっている。

その際の具体策としては、①競争力のある高品質・高付加価値の商品・サービスの積極的な投入、②新たな魅力を備える形での店舗や施設の改装、③Eコマースの展開を通じた販売チャネルの拡充、④移動販売や宅配サービス、特定地域への高密度出店、免税店の拡充等による利便性の向上など、価格面以外での差別化を図ることにより需要の獲得を進める先が多くみられる。特に最近では、消費増税後に売上の低迷が続いた先

が多いこともあって、こうした施策の展開に当たって、業態を問わず、目先の需要拡大が見込めるシニア層や訪日外国人を主たるターゲットとする先が増加しているのが目立っている。

また、このような当面の売上増強策に加え、中長期的には少子高齢化に伴い国内需要が減少していくとの見方のもとで、今後の生き残りに向け、①将来の主要顧客となり得る若年層やファミリー層へのアプローチ強化、②新規事業への参入や企業間での連携・統合、③域外や海外の需要取り込み等に取り組む先が少なからずみられる。そうした中で、現状でも深刻化している人手不足が、先行きの事業展開に際しての制約要因となることを懸念する声も聞かれる。

### (2) 価格設定行動

この間の企業の価格設定行動をみると、消費増税後に売上が低迷する局面では、ひと頃みられた価格引き

上げの動きは一服した。もっとも、足もとでは、食品スーパーや宿泊・飲食を中心に、このところの高品質・高付加価値の商品・サービスに対する需要の持ち直しも受け、原材料価格の高騰や人件費の増加など既往のコスト増加を吸収する観点から、商品の品質・量やサービスの内容等を必要に応じて見直しつつ、戦略的に値上げに踏み切る動きが着実に広がっている。また、百貨店や専門店等でも、セール期間の短縮等により値引き販売を極力抑制する先がみられるようになっていく。

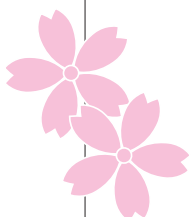
このような価格の引き上げについては、これまでのところ目立った売上の減少には繋がっておらず、消費者に概ね受け入れられていると評価する先が大方を占めている。さらに、こうした状況を眺め、一部には、今後の売上動向を見極めつつ、価格のさらなる引き上げを模索する動きもみられている。

一方、需要に力強さがなく、競争環境も厳しい汎用的な商品・サービス

に関しては、消費者の低価格志向が依然として根強く、各種コストが膨らむ中でも、価格の引き上げには慎重とならざるを得ないとする先が多い。このため、総合スーパーやディスカウントショップ、ドラッグストアを中心に、これまでの低価格路線を維持したり、一部には一段と強化する動きがみられている。

### 3. 先行きの見通し

消費関連企業の先行きの販売については、雇用・所得環境の改善を背景に、当面は売上の持ち直しが続くとする先が多く、全体としても現状の緩やかな改善基調が続くものとみられる。ただし、さらなる価格引き上げの動きが消費者マインドの悪化に繋がる可能性を懸念する声も一部に聞かれるだけに、今後の消費関連企業の販売動向や戦略に引き続き注視していく必要がある。



# 金融高度化セミナー（地域創生に向けた創業支援への取組み）を開催

日本銀行金融機構局金融高度化センターは、二〇一五年六月四日に、「地域創生に向けた創業支援への取組み」と題する金融高度化セミナーを開催しました。参加者数は約四三〇名でした。

金融高度化セミナーは、日銀の取引先金融機関を対象に開催しているものです。全国の金融機関を対象にした大規模なセミナーは、金融高度化センター開設（二〇〇五年）以来、年平均二回のペースで開催しており、今回のセミナーは金融高度化センター創設一〇周年を記念して開催しました。

政府が策定した「日本再興戦略」では、「開業率が廃業率を上回る状態にし、米国・英国レベルの開業率一〇パーセント台（現状約五パーセント）を目指す」ことを謳っています。こうした目標を達成するために、地域経済の新たな担い手となる創業者を支援していくことが重要であり、特に地域とともに生きる金融機関にとっては、地

域の活力や取引基盤を維持していく上で大きな課題となっています。



今回のセミナーでは、岩下直行金融高度化センター長の開会の挨拶に続き、金融高度化センター創設当時の日銀総裁で、現在キャノングローバル戦略研究所理事長である福井俊彦氏から祝辞を頂いた後、創業支援や地域活性化に金融面から取り組んでいる実務家、専門家による講演およびパネル・ディスカッションを行いました。

岩下金融高度化センター長は、開会の挨拶において、金融環境が落ち着いている中で、金融界でも創業支援に対する機運が高まってきているが、再び金融環境が厳しい

局面を迎えた時に、短期的に収益に結び付きにくいビジネスである創業支援への取組みを継続できるかは、地域の事業を支えようとする金融機関のスピリットにかかっていると話しました。

キャノングローバル戦略研究所の福井氏は、祝辞において、金融高度化センター創設一〇周年を振り返り、金融高度化センター創設の経緯などを話されました。また、先進国・新興国ともに潜在成長力が低下している中、イノベーションの必要性を強調され、知識創造型のベンチャー・ビジネスをサポートするため、金融機能のさらなる高度化が必要であると説明されました。

続いて、山口省藏金融高度化センター副センター長、増田寿幸氏（京都信用金庫理事長）、奥田展久氏（日本政策金融公庫国民生活事業本部創業支援部創業支援グループリーダー）による講演が行われました。山口副センター長は、起業に対する社会的な位置づけが低いことを背景に日本の開業率は他国に比べて低い状況にあるが、創業支援の機運は確実に高まっていると説明しました。課題として、金融機関は創業のステップに応じたさまざま



約430名が参加した金融高度化セミナー



創業支援には金融機関のスピリットが重要と語る岩下センター長



センター創設10周年を振り返り祝辞を述べるキャノングローバル戦略研究所・福井理事長



創業支援の現状と課題について語る山口副センター長





“起業家は社会の宝”と語る  
京都信金・増田理事長



広範な創業支援について語る  
日本政策金融公庫・奥田グループリーダー



豊富な創業支援メニューについて語る西京銀行・末田部長



本部専担部署を中心とした創業支援の展開を語る福井信金・柳谷課長



交付金を活用した地域活性化について語る但馬信金・宮垣部長

まな支援を前向きに行っているが、  
創業者側からみるとなお十分でない点を挙げました。

京都信用金庫の増田氏は、経営の方針を、現場に明確に伝えることの重要性について語られました。創業支援に関する理解や共感が得られておらず、担保や事業実績のない融資に慎重であった現場に対し、「創業・開業のご相談は京信へ」と書いたポスターを全店に掲示した他、「リスクに挑戦する起業家は会社の宝物、金融機関はこれを支援する責務を負う」といったメッセージを発信したことで、融資が大幅に増加したことの紹介がありました。また、創業支援融資のリスクについて、「倒産実績率が現時点で一パーセントを切る水準であり、そこまでハイリスクではない」と述べ、創業支援の採算性についても、「儲かるか儲からないかは誰にも分からないが、分からないからこそ、やってみるべきである」と話されました。

きである」と話されました。

日本政策金融公庫の奥田氏からは、二〇一四年度の創業支援融資先は二万六〇〇〇社、雇用創出効果は約一〇万人に上るとの説明がありました。上場企業の一割強が創業前後に公庫を利用しており、今でも当時の感謝の念を口にする経営者が存在するそうです。また、金融機関からの調達割合が高いほど、創業後の売上が増加する傾向にあり、創業資金については、五割以上を金融機関から調達することが望ましいとの説明がありました。さらに、創業後うまく存続していく先はリスク要因を織り込んだ売上計画を立てるが、廃業してしまう先は希望的な計画を立てる傾向にあるため、金融機関のリスク分析の強みを創業計画のブラッシュアップに活かす必要があるとの話がありました。

◆◆◆  
パネル・ディスカッションには、

奥田展久氏、小松真実氏（ミュージックセキユリティーズ代表取締役）、末田義明氏（西京銀行執行役員地域連携部長）、宮垣健生氏（但馬信用金庫本店営業部長）、柳谷修平氏（福井信用金庫営業推進部長人営業課長）が登壇されました（モデレーターは山口副センター長）。まず、それぞれが取り組んでいる、創業支援や地域活性化策について紹介していただきました。

西京銀行の末田氏からは、「創業セミナー」や「創業塾」の他、「ソーシャルビジネスアイデアプランオーディション」、「ビジネスプランコンテスト」の開催など、豊富なメニューで創業を支援している現状の説明がありました。また、高齢化が進む瀬戸内の島で、廃校をコミュニティケア施設に転換する事業を手掛け、雇用を創出した事例の紹介がありました。

創業支援融資の事務フローに本部専担部署が深く関与し、ノウハウを集約することでレベルアップした支援を実現しているとの説明がありました。また、事業計画を判断する際には、仮に事業に失敗しても再起可能な資金計画になるように指導していることや、創業支援の取組み実績を店舗業績評価に反映したこと等が契機となり、創業関連融資先数が大幅に増加したことが紹介されました。

但馬信用金庫の宮垣氏からは、地元豊富な資源や人材を活用する地域活性化事業の実現のため、総務省の「地域経済循環創造事業交付金」（地域活性化に資する新しい事業の立ち上げに必要な初期投資費用に對し、上限五千万円までの交付金が支給される）を積極的に活用しているとの説明がありました。申請主体の地方自治体や事業者に対し積極的に提案して回り、二〇一四年度に

において一〇件の新規事業が立ち上がったとの話がありました。

ミュージックセキュリティーズの小松氏からは、投資型クラウドファンディングを活用した企業の資金調達サポートについて紹介がありました。Web上に事業者ごとの紹介ページを掲載し、全国の個人から資金を集める仕組みを創ることで、事業者のニーズに応えたいと話していました。また、現在、四三の地域金融機関と業務連携し、応援したい企業の紹介を受けている他、地方自治体とも連携しているとの話がありました。



パネル・ディスカッションでは、①創業者の掘り起こし、②関係機関との連携、③創業支援体制の整備の三点をテーマに取り上げました。

①「創業者の掘り起こし」に関しては、末田氏から、「創業Ⅱ西京銀行」と連携してもらえよう、イメージ



クラウドファンディングの魅力語るミュージックセキュリティーズ・小松代表取締役

を植え付けることが必要であり、「創業セミナー」を頻繁に開催している他、テレビCMや新聞広告等、さまざまな媒体を活用した宣伝に取り組んでいるとの説明がありました。

また、柳谷氏からは、業界関連業者から情報を得ることが有効であるとして、例えば、医療関係であれば、医療機器・薬品の卸売業者や会計事務所には、創業支援を専門に扱う担当者が存在することから、そうした担当者から開業に関する情報が集まるとの紹介がありました。この他、宮垣氏からは、商店街活性化イベントとして若手クリエイターと消費者の出会いの場をプロデュースすることで創業に繋がった事例が紹介されました。

②「関係機関との連携」に関しては、地方自治体、公的金融機関、クラウドファンディングとの民間金融機関の関わり方や役割について意見を聞きました。

「地方自治体との連携」では、宮垣氏から、「地域経済循環創造事業交付金」の積極的な提案を通じ、連携が強化されたり、新たな協力関係の構築に繋がった事例が紹介されました。

「公的金融機関との連携」では、



創業支援の課題について議論されたパネル・ディスカッション

公的金融機関の立場である日本政策金融公庫の奥田氏から、公庫が持つ情報やノウハウを民間金融機関が共有することによって、「不可能が可能になる」との話が聞かれました。この点、民間金融機関サイドの福井信用金庫・柳谷氏は、「公庫を頼りになるパートナーと考えている」とし、リスク分散だけでなく、創業者が作った事業計画の妥当性を、民間金融機関と公庫がそれぞれ異なる目線でチェックできることが有効であると話しました。

「クラウドファンディングとの連携」では、小松氏から、クラウドファンディングが地域金融機関の取引先企業の販売促進支援、新規顧客開拓のツールとして活用されていることが紹介されました。

③「創業支援体制の整備」に関しては、末田氏から、創業支援を銀行の風土や文化として根付かせる必要があるとして、「創業セミナー」等に担当地域の職員の参加を呼び掛け、創業希望者と一緒に勉強させているとの紹介がありました。また、創業案件の受付件数や取組みの好事例を業績表彰の対象にすることで、営業店をやる気にさせているとの話がありました。柳谷氏からは、融資先が倒産した場合、二度と同じ失敗を繰り返さぬよう徹底的に検証し、その後の審査、事業計画の作り込みに役立っているとの話がありました。



講演者やパネリストのメッセージを聞いた参加者からは、タイムリーなテーマ設定の中で、「他金融機関の事例紹介が豊富で参考になった」旨のコメントが多数寄せられた他、「経営者の熱い思いや意気込みに感銘した」といった評価の声も多く聞かれました。

以上のセミナーの講演およびパネル・ディスカッションの要旨・資料は、日銀HPの「金融システム」↓「金融高度化センター」のコーナーをご覧ください。



## 日本銀行本店本館を舞台に ドラマ撮影

▼二〇一五年五月に、国の重要文化財である日本銀行本店本館で、ドラマ撮影が行われました。

▼このドラマは、明治から昭和初期に活躍した高橋是清（一八五四～一九三六）の生涯を描いたものです。高橋是清は、留学先の米国で騙されて奴隷契約を結ばされたり、ペルーの銀山開発事業に失敗して一文無しとなったりもしますが、最後には、



ドラマ「経世済民の男 高橋是清」NHK総合で二〇一五年八月に放映済みの撮影の様様（総裁役のオダギリジョーさんが日本銀行に到着したシーン）

大蔵大臣や総理大臣を歴任し、七度目の大蔵大臣の時に、二・二六事件の凶弾に倒れる波瀾万丈の生涯を送ります。

日本銀行との関係では、失意の中、ペルーから帰国したところで、当時建築中であり、今回の撮影の舞台ともなった日本銀行本店本館の建築事務主任を任されることとなります。その後、その実力を認められ、日本銀行副総裁、総裁へと、活躍の場を広げていきました。

▼日本銀行のドラマ撮影協力は、近年では、昨春に続いて二度目となりました。今後も、ドラマを通じて、皆さまが、日本銀行に親しんでいただけなら幸いです。

## 二〇一五年 国際コンファランスを開催

▼日本銀行金融研究所では、六月四日・五日に、日本銀行本店にて、二〇一五年国際コンファランスを開催しました。

一九八三年の第一回以来、各回のコンファランスでは、著名な学者や中央銀行幹部等を招待し、わが国や世界経済がその時々直面していた



黒田総裁の開会挨拶

問題を取り上げ、その実態や背景を金融政策運営のあり方に関連づけて議論してきました。

▼二回目となる今回のコンファランスのテーマは、「金融政策…効果と実践」でした。学界、中央銀行、国際機関から参加した約九〇名の有識者が、テーマに沿ったさまざまな論点について意見交換を行い、交流を深めました。

▼黒田総裁の開会挨拶では、中央銀行が現在直面している課題が挙げられ、課題克服に向けた前向きな姿勢と確信の重要性が述べられました。伊藤隆敏教授（コロンビア大学兼政策研究大学院大学）が座長を務めた政策パネル討論では、中曽副総裁を含む中央銀行関係者等がパネリスト

を務め、開会挨拶で挙げられた課題や、近年注目を集めている「長期停滞論」について、参加者を交えた活発な議論が行われました。また、中央銀行エコノミストや学者による五つの論文報告セッションがありました。最後は、アイケングリーン教授（カリフォルニア大学バークレー校）による長期停滞論に関する「前川講演」（金融研究所発足時（一九八二年）の総裁・前川春雄氏にちなんで名付けられています）で締めくくられました。

▼当日の様様については、金融研究



学界、中央銀行、国際機関から、約90名の有識者が参加

所の機関誌『金融研究』等で公表予定です。詳しくは金融研究所HPをご覧ください。  
<http://www.imes.boj.or.jp/index.html>

## 広島支店は開設二一〇周年を迎えました

▼日本銀行広島支店では、支店開設二一〇周年（一九〇五年九月一日出張所開設）を記念して、八月二十日（木）～九月一日（火）に「日本銀行広島支店開設二一〇周年記念展」を、被爆建物として現在も保存・活用されている「旧日本銀行広島支店（二代目営業所）」において開催しました。本年が被爆七〇周年の年であることもあって、多数の市民の方



金田一支店長による講演。最近の金融経済情勢や本行の政策について解説しました



旧営業所での記念展示。開設から今までの110年間の広島支店の歩みの他、日本銀行の業務について紹介しました

地元メディアにご来場いただきました。

▼記念展示では、広島支店が開設された経緯や大正時代から昭和初期の広島金融界の状況の他、一九四五年八月六日の被爆時とその二日後の八日には市内二金融機関と共同で広島支店において営業を再開した模様について、金融研究所保管資料とともに紹介しました。

また、「建物からみた日本銀行広島支店の二一〇年」と題し、広島支店初代営業所、二代目営業所建物の特徴、被爆建物としての歴史を、建物案内も行いながら文書局技師が解説しました。同講演には、多くの建築の専門家が出席されました。あわせて、設計者である辰野金吾（日本銀行本店本館や東京駅を設計）やそ

の弟子の長野宇平治（日本銀行本店旧館の他多くの支店を設計）の業績を紹介しました。

さらには、銀行券、経済調査および業務全般をテーマに、日本銀行の機能と役割について説明し、最終日には、金田一弘雄（きんたいちひろお）広島支店長が「最近の金融経済情勢と金融政策について」と題する講演を行いました。

▼また、期間中、広島県金融広報委員会が、横浜国立大学西村隆男教授を講師に「金融教育講演会」を開催し、多くの教育関係者が参加された他、「知るぼると親子セミナー」では、銀行券一億円、小判、千両箱（いずれもレプリカ）などにも触れていただき好評でした。

▼広島支店は、これからも広島県における中央銀行の拠点として、地域経済の発展に貢献していきたいと考えています。

## 「日銀夏休み子ども特別見学会二〇一五」を開催

▼「日銀って何をしているところ？」。そのようなお子さまの好奇心にお応えするため、日本銀行本店では、七月二十七日（月）～三十一日（金）に「日銀夏休み子ども特別見学会

二〇一五」（協力：金融広報中央委員会）を開催しました。

▼はじめに、日銀の役割や仕事について知っていただくため、紹介ビデオを見ていただいた後、国の重要文化財に指定されている本館や実際に窓口業務を行っている新館営業場な



10kgの1億円バック（模擬券）、重かったかな



お札には、偽造防止のためにたくさんの工夫が施されています





特別議長の黒田総裁と金融政策について議論(撮影:野瀬勝一)



模擬金融政策決定会合を体験した中学生の皆さん、黒田総裁を囲んで(撮影:野瀬勝一)

どを見学していただきました。

▼小学校四年生～中学生のお子さまと保護者の方向けの体験学習では、一億円の重さを体験したり、お札の数え方や偽造防止技術について学んでいただきました。

親子の皆さまからは、「お札に隠されている工夫を探すのが楽しかった」、「普段何気なく使っているお金について、子どもと一緒に学習でき、貴重な経験となった」などの感想をいただきました。

▼また、中学生を対象に、ご好評により今回で三回目となる「金融政策を決めるのは、君だ！」を実施しました。

「都市部の地価に一部上昇の動き」などの架空のニュースをもとに、景気への影響などとそれを踏まえた金融政策を、グループごとに議論していただきました。各グループの代表者が意見を持ち寄り円卓に着席すると、黒田東彦総裁が登壇し議決に飛び入り参加しました。各グループの議論の結果を聞いたうえで、実際の決定会合と同様に議決を取り、金融政策を決定しました。

参加者からは「今まで何でもないように思えたニュースも、景気に関係しているのだと分かり、これから興味を持って見ようと思った」などの声が聞かれました。



館内イメージ

▼ご好評をいただいているこちらの見学会の次の開催は、春休み期間中を予定しています。どうぞご期待ください。

## 貨幣博物館リニューアルオープンのお知らせ

▼日本銀行金融研究所貨幣博物館では、お金に関するさまざまな資料を収集・保管し、その調査研究を進めながら、広く公開しています。二〇一五年初からリニューアル準備のため一時休館していましたが、二〇一五年十一月二十一日(土)、

装いも新たに開館する運びとなりました。

▼館内では、新しい研究成果を踏まえた展示から、楽しい体験展示、記念撮影スポットまで、親しみやすく、分かりやすく、どなたにも楽しんでいただけるような取り組みがいくつかあります。珍しいお金や関係する資料について、以前より見やすくなった新しい展示ケースで、じっくりとご覧いただけます。

▼貨幣博物館は、入館無料で、東京や日本橋でのショッピングや観光の機会に合わせて、どなたでも気軽にご来館いただけます。年内の土曜日には開館時間を十九時まで延長します。なお、二〇名以上の団体のご利用には三カ月前から事前の電話予約



## 編集後記

■この秋号を編集した時期は、猛暑が続く夏の日々でした。夏生まれの私は、多少の暑さには耐える自信があったのですが、気温が35度を超す日が続いたことから、さすがにバテ気味の状態でした。今日はウナギを食べて元気を取り戻そうか、それともビタミン剤で調子を整えようかなどと思案している中、為末さんのインタビューや辻井さんの対談の原稿が次々に出来上がってきました。

それらの原稿の編集作業を進めていくうちに、為末さんや辻井さんのスポーツや音楽に対する情熱に改めて触れることができました。また、お二人が熱心にお話しされる合間に見せる素晴らしい笑顔（その素晴らしさは掲載している写真でご確認ください）を思い出し、編集が終わる頃には、気分は壮快、すっかり元気を取り戻していました。

素晴らしい人との出会いや思い出は、ウナギよりもビタミン剤よりも、夏バテに効くことが良くわかりました。さて、この秋号を読まれた方々にも、お二人のバイタリティーがうまく伝わったでしょうか？ そうであれば幸いです。ぜひ、周りの方にも為末さん、辻井さんのお話、そして「にちぎん」をご紹介いただければと思います。（高橋）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

([http://www.boj.or.jp/announcements/koho\\_nichigin/index.htm/](http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/))

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<http://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2015年秋号  
編集・発行人 高橋経一  
発行 日本銀行情報サービス局  
〒103-8660  
東京都中央区日本橋本石町2-1-1  
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所  
印刷 株式会社アイネット  
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

\*本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

をお願いしており、十二月一日ご来館分から予約の受付を承ります。  
▼貨幣博物館で、お金を見て、学んで、皆さんでお金の話をしませんか。  
※十一月二十日まで休館中です。最新のリニューアル  
アル関連情報、開館時間、休館日等の情報は貨幣博物館HPをご覧ください。  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>  
【入館料】無料



【所在地】東京都中央区日本橋本石町1-3-1（日本銀行分館内）

【お問い合わせ先】

〇三—三二七—三〇三七

## 「にちぎん体験二〇一五」開催決定

▼日本銀行本店では、今年も「にちぎん体験二〇一五」を開催します。

①レクチャー付き見学ツアー（要予約）：国の重要文化財に指定されている本館や実際に業務を行っている新館営業場への見学ツアーに加え、日銀の仕事をテーマに講座

を行います。

②企画展（予約不要・入退場自由）：本館内の特設展示室において、支店の歴史や建物などについてご紹介

③「見学付き市民講座（要予約）」：日銀職員が講師を務め、お金をめぐる話題などをテーマに講座を行います。また、講座の後には、旧地下金庫と旧営業場の見学にご案内します。

【プログラムごとの開催日時】

①：十月二十六～二十九日、十一月二日、四日

②・③：十月三十一日・十一月一日

▼詳しい内容や予約方法などについては、日銀HPをご覧ください。

▼この機会に、ぜひ日本銀行にお越しください。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

【お問い合わせ先】

情報サービス局総務企画グループ  
〇三—三二七—二五六八







from Basel



スイス・バーゼルに所在する国際決済銀行（BIS < Bank for International Settlements >）。各国の中央銀行・金融庁幹部が世界の金融経済をあらゆる角度から議論。国際決済銀行が事務局機能を提供するバーゼル銀行監督委員会では、「バーゼル III」をはじめとするさまざまな国際金融規制を策定。

## スイス人の奇抜な発想

スイスは物価が高いことで有名です。例えば、マクドナルドのビッグマックセットが12スイスフラン（現在の為替相場で約1,500円）、スターバックスのドリップ・コーヒー（トールサイズ）が5.5スイスフラン（約700円）です（いずれも8%の税込み価格）。同じく物価の高いことで知られている北欧の消費税が約25%であることに比べて、スイスの消費税8%はかなり低い水準ですから、税抜きでみるとスイスの物価の高さは群を抜いています。

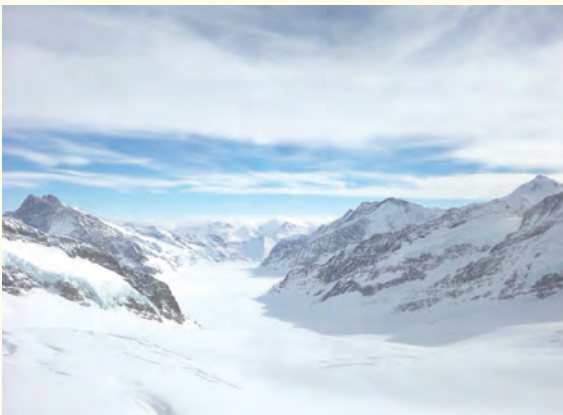
そんなスイスで昨年、少々驚きの国民投票が行われました。時給22スイスフラン（約2,800円）の法定最低賃金の導入の是非を問うものです。週42時間のフルタイム労働で、月給に換算すると4,000スイスフラン（約52万円）になります。報道によると、スイスには最低賃金を定める制度はないものの、働き手の約90%はすでに月50万円超の収入を得ているそうです。国民投票は否決されましたが、提案された賃金水

準自体は、当地ではそれほど非現実的なものではないと受け止められています。とはいえ、日本人である筆者の感覚とは大きく異なります。

スイスは物価が高いにもかかわらず、多くの観光客が訪れます。風光明媚なスイスアルプスにて、夏はハイキング、冬はスキーが盛んです。国内の幹線道路や鉄道が整備されているので、バーゼルからもアクセスが良いです。日本では到底考えられないのですが、標高3,454メートルのユングフラウヨッホまで鉄道で運んでくれますから、バーゼルから4時間程度で写真の氷河を目前に見ることができます。鉄道が電化されて間もない頃の1895年に国家プロジェクトとして着工し、1912年に開通したと聞くとスイス人の観光地づくりの先見の明に驚かされます。

（バーゼル銀行監督委員会事務局、バーゼル）

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



スイス初の世界自然遺産であるユングフラウ・アレッチ地域のアレッチ氷河。山の麓からトラムや鉄道を乗り継いで1時間半程度でアレッチ氷河を見ることができます。



バーゼルの街を流れるライン川。水流が速く、また船舶の往来があることから（写真の右側エリア）、基本的に遊泳禁止ですが、市の施策としてこのエリアだけ特別に遊泳可能となっています。そのため、夏には、市外からも多くの人が泳ぎにやってくるにぎわいを見せます。



にちぎん